

# 転生架空馬の夢の記録（ 夢日記）

よみびとしらず

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2021年ウマ娘に嵌り、ネット上の転生架空馬主人公のお話に嵌り、読み耽つてい  
くうちにオリジナルの様な転生架空馬のお話を夢に見るようになりました。

折角なので記録を取りtwitterに置いていたところ、夢のお話を見たいと言う  
意見を聞き憶てる範囲、アウトプット出来る範囲でお話を掛けたら良いかなと思いま  
した。

# 目

# 次

はじめに

1

転生架空馬の夢の全記録の概要欄

chapter. 5 「Beer! Beer!」  
chapter. 6 「調教馬場」  
95  
77

架空馬の夢物語本編

case. 12

チヨコエクレール

chapter. 1 「変身!!」

13

chapter. 2 「深夜のお茶会」

40

すばん

170

chapter. 7 「コンビニ」  
114  
chapter. 8 「はじめてのおる

chapter. 3 「真夜中の散歩」

63

chapter. 4 「トレセン散策」

63



# はじめに

## 転生架空馬の夢の全記録の概要欄

- ・ 1回目 馬名：不明 血統：不明 年代不明  
生まれて直ぐに立ち上がる事が出来ずに殺処分
- ・ 2回目 馬名：不明 血統：不明 年代不明  
生まれて立ち上がるも母馬に異物扱いされ、蹴られて踏まれて死亡
- ・ 3回目 馬名：不明 血統：不明 年代不明  
初めての放牧中に転倒して怪我をして死亡
- ・ 4回目 馬名：不明 血統：不明 年代不明  
放牧中に同年代の仔馬が居たので話しかけようとしたらその子の母馬に蹴られて踏まれて死亡
- ・ 5回目 馬名：不明 血統：不明 年代不明  
放牧中に同期の群れに馴染めず虐められて怪我をして死亡
- ・ 6回目 馬名：不明 血統：不明 年代不明  
育成牧場へ行くものの、調教内容が理解できず、競走馬になれないため、未出走→殺

## 2 転生架空馬の夢の全記録の概要欄

処分

・7回目 馬名：トップグローリー 青毛 血統：父サンデーサイレンス、母不明（英単語っぽい名前） 年代：2002～2005

栗東・八百長政厩舎（架空）所属。白い部分が全く無い青毛未勝利馬で気が弱く、人間やトレセンの他の馬達から虐めを受ける。

お向かいの木原厩舎にやつて来た1歳年下の白毛の競走馬「サンジエニュイン号」の圧倒的美貌に脳を焼かれ、彼に恋するが叶わず。

サンジエニュイン号が皐月賞に出走した同日、トレセンより遠く離れた競馬場（小倉？）でレース中に事故死

・8回目 馬名：ドリームキャプチャ 黒鹿毛 血統：不明（父系・母系どちらかにエルコンドルパサー） 年代：202X?

栗東・海老名厩舎所属。エルコンドルパサーに瓜二つの姿を持つ。エルコンの生まれ変わりだと言われ、大層に可愛がられる

コントレイル号以来の無敗の三冠馬と国内全レース無敗の記録を打ち立てフオア賞優勝を経て凱旋門賞に出走するも

ゴール20m手前で両前脚粉碎骨折により転倒、後続馬に轢かれ騎手・馬とも死亡する

・9回目 馬名：不明 血統：不明 年代2016～2017?

放牧中に横になつて熟睡していたところ熊に襲われ生きながら捕食され出血多量で死亡

メロディーレーンと同期で同牧場生まれ。

この牧場は放牧地に凶暴な野生動物が出没し、育成馬が襲われることが多発していたが本馬はそれに気が付かなかつた模様

・10回目 馬名：ブラックダイヤモンド 血統：父ブラックタイド、母：シユガーハート 年代：202X?

キタサンブラックと同血統の歳の離れた弟分。ウマ娘ヲタク新人馬主に1億円で落札されるも走らず見捨てられる。

屠殺業者のトラックに載せられる直前で暴れ美浦トレセンを脱走し、生まれ故郷の北海道を目指すも福島県の山中で力尽き息絶える。

・11回目 馬名：ファイズリース 牝 黒鹿毛 血統：不明（デイープインパクトさんと種付け相性が良い血統らしい） 年代：2000～2006

デイープインパクトと同期で別厩舎にもかかわらず頻繁に調教の相手をする厩舎公認の仲で史上初の無敗三冠牝馬。史上初の同年無敗三冠馬同士の戦いとなつた有馬記

念後のウイニングランで告白して相思相愛の恋仲になる。

2006年の凱旋門賞出走時に体調を崩し苦しんでるデイープに自厩舎で大事なレース前に馬主から貰つてる”トクベツなごはん”を分け与えた事がきっかけで禁止薬物が検出され2頭ともに失格になる。

帰国後の再検査で禁止薬物常用の疑いで国内レースの勝ち鞍をすべて剥奪され絶望する中、馬主が証拠隠滅とディープ陣営へ冤罪を掛けようとしてることを知り、担当厩務員とともに阻止して告発するため立ち上がるものの馬主に見つかり激しい銃撃を受ける。

銃弾に倒れ瀕死の状態で口とお尻にダイナマイト詰められて、ガス漏れ爆発火災事故に見せかけて厩舎ごと爆殺される。

・12回目 馬名：チョコエクレール 牡 黒鹿毛 血統：不明（トニービンとステイゴールドの血が入っているらしい） 年代：2021 or 2022?

美浦の御手洗厩舎（架空）所属の1勝クラスの競走馬。濃いこげ茶色の馬体と馬名から「チョコ」と呼ばれる。

ある日、ファンレターと一緒に贈られ馬房に飾っていたチョコエクレール号の擬人化イラスト（ウマ娘のナリタトツプロードそつくりのキャラ）を見詰めていると突然光に包まれて意識を失い、その後目を覚ますとなんとイラストの女の子の姿になっていた。

どうやらイラストに込められた不思議な力によつて、真夜中の間だけウマ娘の姿に変身できるようになつていた。

ウマ娘の姿に戸惑いつつも、真夜中のトレセンを散策したり、抜け出してコンビニ行つたりと馬とは違う自由な身体を楽しみつつ過ごしていた。

そんなある日、いつものようにウマ娘に変身して馬房を抜け出して散策に出かけようとしたところ、テキに見つかってしまう。最近厩舎に不審者が出没すると聞き、張り込みをしていたのだつた。

咄嗟に逃げようとするも取り押さえられてしまう。もう駄目かと思った瞬間、「千代子……？お前、千代子なのか？」目を開けるとそこには驚き狼狽えるテキの顔があつた。

彼、いや彼女の顔がテキの今は亡き一人娘「御手洗千代子」と瓜二つだつたのだつた

。

転生架空馬の夢で初めてBAD ENDを迎えた夢。正式にはBAD ENDは存在するが其処に辿り着く前に現実の目覚まし時計によつて目が覚めた感じ。

・13回目 馬名：ビオフレグランス 牝馬 青鹿毛 血統：不明 年代不明（2007?  
?~2012年?）※史実と乖離がかなりある。

栗東の香風厩舎（架空）所属。2~3歳の頃は勝てず燐ぶつていた善戦馬だったが古馬に入り頭角を現す。

圧倒的な美貌を持ち、彼女の周りの牡馬は皆軒並み掛かり馬つ氣を出してしまう事から「魔性の牡馬」「競走馬のサキュバス」と呼ばれ、トレセンでは常に複数頭の牡馬を侍させていた事から「馬サーの姫」とも呼ばれていた。

牡馬からは嫌われており、特に同期で栗東牡馬組のボスだつたカレンチャンとは険悪の仲で、トレセン内で出会うと一触即発状態になる為、鉢合わせにならないよう両厩舎で緻密に連絡を取りスケジュール調整に苦労していた。

この時代は栗東には牡馬を束ねるカレンチャンと牡馬にもかかわらず牡馬組と一部牡馬組を束ねるビオフレグランスの二頭のボスが君臨し、競走馬達は二つの派閥陣営に分かれお互いに睨み合っていたため、トレセン内の空気は非常に張りつめていて人馬共にピリピリしていた。

「発情期の牡馬が出すフェロモンを自分の意思で自由に意図的に発生・散布出来る。フェロモンは牡馬だけではなく牝馬にも効果がある」と言う転生チートスキルを持ち、レースではそのスキルをフル活用してライバル達を蹴落とし古馬G1戦線を荒らしていく。

ただ、彼女自身の競争能力は高くなくチートスキルに頼り切つりだつたため、優勝したレースの勝ち時計は軒並みワースト記録を付けている。

201X年、二度目の天皇賞春では多数のライバル馬がパドックや返し馬やゲート入

りで暴走脱落し、残った馬達もレース中に軒並み掛かり逸走や不自然な失速をし、大混乱の中悠々とゴール板を駆け抜け歴代ワーストの勝ち時計4分と言う記録を作り物議を醸す（通称：ビオフレグランス号事件）

事態を重く見たJRAはビオフレグランス号の馬体の精密検査を求め、所属厩舎の承諾を得たのち、栃木県のJRA競走馬研究所へ移送する事を決定する。

しかし、移送途中に東名高速道路日本坂トンネル内で多重衝突事故に巻き込まれ車両火災によつて死亡する。馬運車に同乗していた管理調教師・担当厩務員・主戦騎手・馬主も亡くなつたため真相は解明されないままになつてしまつた。

・14回目 馬名：ニシノニコット 牡馬 黒鹿毛 血統：父カイザーフエルゼン・母ヒメカミアゼリア 年代不明（2018?~?）

美浦の笑福厩舎（架空）所属。父親似のうるさい牡馬。パドックで人間に囲まれたりカメラのレンズ向けると喜んで馬つ氣出したり歯をむき出しして笑うような表情を浮かべる。

夏の暑さに弱く当歳馬～2歳デビュー前の頃には夏場に何度も体調を崩したり、熱中症になりかける。そのためデビューは2歳最後の12月だつた。

夏に弱い当馬の体質を考え夏競馬は避ける予定だつたがレースのローテーションの都合で夏どうしても走らないといけなくなり7月（もしくは8月）の新潟競馬場のレー

スに出走する。当然、暑さでやられヘロヘロになりタイムアウト寸前の殿負けした後倒れそうになる当馬を助けるため、厩務員さんが大急ぎで競走馬用の大型シャワー場へ連れて行きシャワーを浴びせる。その結果、シャワーを浴びた当馬は非常に喜びレース前よりも元気になり、激しく飛び跳ね何度もシャワーを浴びようとする。

これ以来、競馬場に設置された競走馬向けの大型シャワーが大好きになり、シャワーを浴びたくて夏競馬を頑張る。一年で夏競馬が一番成績が良くなるようになる。走つた後は大型シャワーに何度も入り、最後はシャワーの中で歯をむき出しにして笑いながら寝つ転がってシャワーを堪能する。

オーナーの西野さんが大好きで姿を見つけると尻尾を振り歯をむき出しにして笑いながら駆け寄つて来る。オーナーに抱き着きと言う名のタックルを食わらせ顔を何度も擦り付け、あげくオーナーの顔をしつこく舐め回すようになる（通称：ベロちゃん2世）。オーナーの事が大好きすぎて日本ダービーで最後の直線で先頭を取るもオーナーの姿を見つけて喜び近づくため大きく斜行してしまい降格処分を受ける。

騎手に鞭を入れられると笑い顔を作る為掲示板サイトで「マゾ馬」と揶揄される。ただし本人（本馬）は鞭で叩かれるのが嬉しいわけでもマゾでもなく叩かれた痛みで笑い顔みたいな表情が出来てしまふだけらしい。

勝ち鞍はOP戦を3勝（レース名不明）G1～G3戦に何度も出場するものの掲示板

には入れず2桁順位で終わる。

7歳で引退後、種牡馬にはならず生まれ故郷の西野牧場へ繫養される。2年後、牧場を襲つた季節外れの猛暑による熱中症で9歳で亡くなる。

・15回目 馬名：パタパタママ 牝馬 青鹿毛 血統：不明（両親はメジロ冠名が付いた） 年代：不明

美浦の■■■厩舎（架空厩舎、厩舎名は忘失）所属。元メジロ牧場の生産牧場■■■生まれ、両親は共にメジロの冠名を持つ馬である意味生粋のメジロ血統の馬でウマ娘ファン（メジロ家推し）の新人馬主に引き取られる。

煩い馬で落ち着きがなく忙しなく動き回っている様子と、「煩いけど見た目はとても綺麗だし、見つめ続けると何だかどこか母性を感じて甘えたくなる。バブミを感じてオギヤリそう（オーナー談）」から「パタパタママ」と名付けられる。2歳7月の新馬戦を目前に控えた6月下旬に難病に罹り高熱を出して数日間生死の境を彷徨う。

「どんなことをしても必ず助けて欲しい」とオーナーが大金をはたいて米国から取り寄せた治療薬によつて一命をとりとめるも、薬の副作用により仔が産めない馬体になつてしまふ。また常に動き回り落ち着きがなかつた性格が真逆のじつとして物静かな落ち着いた性格になる。（あまりにも馬の性格が変わり過ぎて別の似た馬とすり替えられたとかこの馬は実は死んでもう一度生まれ変わったなどと言われる）

3歳1月に未勝利戦でデビューし1勝するもののレースに勝てない日々が続く。オーナーは「事故怪我なく無事に完走して、ついでに出走手当が貰えればそれで十分」と言い現役続投する。

4歳の頃から、周りに馬がよく集まる事・どんなに気性が荒い癖馬も彼女が横にくると大人しくなる、近くにいるだけで馬も人も癒される、何かマイナスイオンが出てる、など良い評判が出て厩舎のマスコット兼リードホース的な立場になる。

また彼女と調教で併せ馬するとどんな馬も素直に調教を受けレース結果が良くなつたとか、一緒に馬運車に乗せると輸送が苦手の馬でも克服してパフォーマンスが落ちないと評判になり調教や遠征の帯同馬として厩舎内外で引っ張りだこになる。

あるレースで返し馬中に放馬して暴れる馬を追いかけ捕まえ大人しくさせた事がJRAの関係者の目に留まつた事がきっかけで現役引退後、東京競馬場の誘導馬となる。

誘導馬になつてからも人や馬から大人気で、誘導馬として出走馬のサポートに徹し、放馬が発生しても彼女が駆け付けるとすぐ止まり他の馬も落ち着くため大変評判になる。またゲート拒否する馬の宥めるのも上手く誘導馬では異例のゲート入りの補助も務める。彼女が本馬場入場係をするレースでは放馬やゲート拒否など事故が殆ど起きたために「本馬場入場誘導馬に「パタパタママ」の名前があるかないか」で馬券購入

を判断する勝負師も居た。彼女の評判は他の競馬場でも有名になり、他競馬場から一時移籍や貸し出しのを声が多数来る。やがて J R A の特例で「G1 レースで問題起こしそうな出走馬が居る場合のみパタパタママ号を誘導馬として指名できる。ただし東京競馬場の都合が優先される」が出される。ただし、2歳新馬戦では彼女の周りに新馬が集まり中々返し馬に入らない、傍から動かず離れたがらない新馬が続出するなどトラブルもあった。

9歳の時、とあるレースで放馬した馬を捕まえ宥めようとしたところ後ろ脚で蹴られ大けがを負つてしまふ。治療と休養のため生まれ故郷の牧場 ■■■ へ移動する。怪我が完治して東京競馬場へ戻る為に牧場を出立する日の朝、ロシア軍による北海道へ軍事侵攻が始まり陸路・空路・海路すべての交通が遮断され東京へ帰れなくなりそのまま牧場へ滞在する事となる。毎日のように空を飛び交う軍用機やミサイルや海側からの艦砲射撃の轟音が響き渡る中、彼女を中心に馬の輪が出来き、彼女の必死の宥めのおかげで放馬等の事故が起きなかつた。「牧場 ■■■ にパタパタママ号が居る。彼女の元へ行けば安心だ」と噂を聞きつけ牧場のある洞爺湖町よりもより東部・海に近い場所にあり先にロシア軍の攻撃を受けた日高町や浦河町などの戦災を受けた牧場からの生き残りの人馬が避難してきて集まり大所帯となる。

やがて南進してきたロシア軍により攻撃を受け牧場は占拠されてしまう。建物や金

品設備類などは略奪放火破壊され、男性スタッフは即射殺、女性スタッフは性暴力を受けた後射殺されるなど牧場敷地内は地獄絵図となる。さらに競馬の無い国であるロシア人にとって気性の荒く従順でない食べる肉の部分が少ない日本の競走馬に価値なんてなく、ロシア兵たちのストレス発散の余興に射撃の的として次々と処分されて行く。

従順で大人しい主人公はロシア兵に殺されずに済んだが銃や刃物を突き付けると怯えて降伏する様子を見せたため、「コイツ頭が良さそう、人間の女みたいだ」と馬姦趣味の兵士によつて凌辱される。

大人の牡馬や牝馬がほぼ殺され尽くし仔馬たちがターゲットになり始めている事を察知した主人公は隙を見て逃げ出し、生き残った5頭の仔馬たちと牧場脱出を図るもロシア兵に見つかり銃撃を受ける。

仔馬たちを庇い、自分の身体を盾にして逃げ続けるも100発を超える銃弾を浴びて力尽き動けなくなってしまう。最後はロシア軍のT-64戦車の主砲を撃ち込まれ仔馬ともども爆散して死亡する。

# 架空馬の夢物語本編

## case. 12 チヨコ工ク レール♪

### chapter. 1 「変身!!」

私は走る。背に人を乗せ、土の上をひた走る。

私は走る。ただひたすらに走り続ける。熱く眩しい太陽の光を浴び、前を走る馬の蹴り上げた砂を全身に受けながら。

「――!!」

背中の人間が何かを叫び、私の首を押しながら鞭を揮う。痛みが走り、弱り始めた気持ちをもう一度奮い立たせる。

前を走る馬。彼彼女を追い抜き先頭に立たなければいけない。もう後は無い、最後の直線だ。

一頭抜いた。でもまだもう一頭が目の前に居る。もうゴール板が見えてるのに、近いのに遠い、後ろ姿。

もつと速く!! もつと速く!!

悲鳴を上げる四本脚を必死に動かして滲む視界を捉えて駆けて行く。

少しづつ縮まる距離、前の馬が横の馬になる。まだ駄目だ、追い抜かないと——。

横の馬の荒い息、散る汗と涎を感じながら私は板を通り抜けた。

背の人間の手が緩む、どうやら終わつたみたい、私は力を抜き、ゆっくりと少しずつスピードを落としてゆく。

どうだつたのだろうか、今回もダメだつたのだろうか。不安に押しつぶされそうになり、恐る恐る人間の方に視線を巡らせる。

視界の隅に写る彼は、笑つていた。砂と汗でドロドロになつた顔を綻ばせて私の首をポンポンと叩いてくれる。

—よくやつた。おめでとう。

そう褒めてくれてる感じがした。私は勝つたんだ、良かつた——。

馬運車と呼ばれるガタゴトと揺れる狭い場所に乗せられて私はおうちに帰つてきた。

降ろされて、いつもお世話をしてくれる人間に牽かれて歩く。この人も笑顔を浮かべていて、私はレースに勝つたんだなど改めて感じる事が出来た。

『ただいまどりましたー!!』  
『おかえりー』

『おかえり』

私が厩舎と呼ばれる住処に入り挨拶をする。すると馬房と呼ばれるお部屋からそれぞれ二頭の馬が顔を出す。

『チョコ、どうだつた?ちゃんと先頭でゴールできたか??』

心配そうに顔を出す小柄の馬はコタロウ。私と同い年の馬だ。

『うん、先頭は取れなかつたけど勝てたみたい。人間達が笑顔で喜んでたし、走つた後に並んで』 クチドリシャシン” して いたから大丈夫だよ!!』

『良かつたあああ……、ボスが「勝てないとチョコが遠くへ連れていかれて二度と会えなくなる』 って脅すから心配したんだよお〜』

ふにやふにやと力が抜けるように座り込んでしまつたコタロウに鼻先を近づけて『心配かけてごめんね。私は大丈夫だよ』 と声をかける。

『先頭は取れないが勝利!、ハナ差か。それでも勝ちは勝ちだ。おめでとうチョコ』  
『ありがとうボス! 私、ボスのおかげでやつと勝てたよ!』

人間に連れられて私の部屋——馬房に入った後、顔を出したら横の馬房から首を伸ばして話しかけてくる大柄の馬はボスことブルドックヘッド。私達の厩舎で一番偉い馬で色んな事を知つててさらに人間の言葉が分かる凄い馬だ。

『ああ、だがまだ油断できない。次のレースも勝つか、最低でも掲示板に乗らないと難し

い。俺達は走り続けるしか無いんだ』

『うん、私頑張つて走り続けるよ！』

ボスは満足そうに頷いた。この馬は私達の世界の事や人間達の事をとても良く知つていて私は尊敬している。

『おっと、人間が来たようだな』

ボスが首を自分の馬房へと引っ込める。すると通路の向こうから人間が歩いてきた。テキ——調教師と呼ばれてる、私達がレースに勝つために色々教えてくれる偉い人だ。

「国崎、お疲れさん。チヨコの様子はどうだ？」

「お疲れ様です、テキ。チヨコの奴はもう大丈夫ですよ。レース後かなり疲れを見せていたので念の為2日休ませてから帰りましたから」

「そうか、それは良かった。まだ疲れが少し残つてるかもしれないから当面は軽い運動を中心に行う。オーナーも焦らなくてよいと言つているし、次は秋後半だな」

「ええ、そうですね」

「ひとまずは未勝利脱出おめでとうだな。頑張ったなチヨコ」

「ところでテキ、その手に持つてるのは何なんですか？」

国崎さんが腕を伸ばして何かを指さすので私も思わずそちらに視線を移す。テキの手には白くて四角い何かが握られていた。

「これか？ああ、チョコ、お前にファンレターが届いているぞ！」

そう言つてテキは手に持つた白くて四角い何かを私に見せる。何だろう？

『それはお前宛に来たファンレターだな』

いつの間にか馬房から顔を出していたボスが答える。ファンレターってなあに？

『お前を応援してくれる人間が感謝の気持ちを手紙と言う物に書いて送るものなんだ。これを貰えるのはとても良い事なんだ』

ボスがそう教えてくれる。私を応援してくれる人が居るなんて…なんだか身体がぽかぽかしてくる。

「じゃあ読むぞ。『拝啓、チョコエクレール号様、御手洗廄舎の皆様へ。チョコエクレール号、3歳未勝利戦優勝おめでとうございます。私はチョコエクレール号の大ファンです。去年夏の新馬戦のパドックで貴方を見て一目惚れしてしまいました。なかなか勝てず苦しい戦いが続く日々の中、厳しい調教を頑張り熟してひたむきにレースへ参加して最後の瞬間まで決して諦める事無く全力で走り続ける貴方に勇気をたくさん貰いました。これからも応援しますので次のレースも頑張ってください。まだまだ暑い日が続きますがお体に気を付けて怪我や病気にならずお過ごしください。』……だそうだ』

テキがファンレターを読み上げて、人間の言葉が分からぬ私のためにボスが横から言葉の意味を教えてくれる。

『チヨコ、良かつたな。お前をこんなにも応援してくれる人が居るなんて』  
『うん、凄く嬉しいよ』

人間から貰う言葉にこんなにも心が動かされるなんて知らなかつた。

「うん？まだ続きがあつたな。ええつと『追伸、チヨコエクレール号の擬人化イラストを描いて同封して贈ります。良かつたら本人に見せてあげてください』：だと。ああ、何か色紙のようなモノが入つてゐるな」

「ファンレターにしては随分大きな封筒だなと思つていたのですが色紙が入つていたんですね。——これは、人間？マンガのキャラクターですか？」

「なんだこりや？」

テキと国崎さんが色紙と呼ばれる四角で固そうな紙を覗き込み首を捻つてゐる。何があるんだろうか？とても気になる。

「うん？ああ、チヨコ、これが気になるのか？」

私が首を伸ばしてゐるのに気づいたテキが色紙を見せてくれる。そこにはこげ茶色の短い髪の女の子が描かれていた。

## ——ドグンツ

何だろう、目が離せない。

「マンガのキャラクターに馬の耳と尻尾を付け足して描いているのか? 「ウマ娘 チヨコエクレール」? 」

「ウマ娘? ああ、テキそれ今若いモンらの間でブームになつてゐる奴で有名な競走馬を人間の女の子にして走らせるゲームですよ」

「そう言えば何回かテレビのCMで見たな、シンボリルドフやナリタブライアンが出てる奴だろう」

「ええ、そうです。でもあれはG1何度も取つたり伝説になつてゐる引退した有名馬が出る物でまだ現役でこれといった勝ち鞍の無い無名のうちのチヨコが出るものではないのですが……」

「そもそも何故女なんだ。うちのチヨコは牡馬だろう? 」

「そのウマ娘と言うゲーム牡馬も牝馬も全部まとめて女の子のキャラクターにするそうです。意味が分かりません」

「本當だな、アニメオタクは何考えてるのが理解できないな」

「何やらテキと国崎さんがブツブツと言い続けてるけど、私はそのイラストから目が離

せずにいた。

「とりあえず手紙読んで妙な絵も見せたし、もう要らないだろう。国崎、これを片付けておいてくれ」

テキが色紙をどこかへ持つていこうとして——、私は咄嗟にその色紙を持ったテキの腕に噛みついてしまった。

「痛てえ！ いててて！！——ッ、こら！ チョコ！ どうした？ やめろっ！ 離せ！！」

ダメ！ お願ひ！ ソレを捨てないで！！ どこかへ持つて行かないで！！！」

私は必死になつてテキの腕を噛み引っ張る。

「コラッどうしたチョコ！ 離すんだ！！」

国崎さんが私からテキの腕を離そうとする。私は首を振つて精一杯抵抗した。

「チョコがこんなに激しい前掻きするなんて初めてだ……」

「わかった！ わかった！ 頼むから離してくれチョコッ！！」

『チョコ！ もういい！ もう大丈夫だから、テキの腕を離すんだ！』

ボスに言われて私はハツと冷静になる。何をしてしまつたんだろうか。

「つつ！ 痛てえ……。わかつた、わかつた。この色紙は捨てないから。おい国崎、事務所にある要らない額縁持つてきてくれ。で、これの色紙を入れてチョコの馬房に飾つてやつてくれ」

「わかりました」

国崎さんが何処かへ走つていき、やがて何かを持つて戻つてきてくれた。

「ほら、これで良いだろうチョコ」

テキが色紙を入れて馬房の中に飾つてくれた。すぐ嬉しい、ありがとうテキ。  
私がヒインヒインと前掻きしながら鳴くとテキは困り顔を浮かべつつ頭を撫でて立ち去つて行つた。

厩舎の明かりが消えて夜の帳に包まれる頃、私はあれからずつと色紙から描かれた女の子から目を離せずにいた。

何だろう……心の中、身体の奥から何か形容しがたいモヤモヤとした物が浮かんでくる

——ドクンツ

何だか身体が熱い、少し視界がぼやけてきた気がする。それなのに色紙の女の子の絵ははつきりと暗闇に浮かんで見える。

——ドクンツ、ドクンツ

あ、あれ？ 変だな？ 体が熱い、眩暈がする。ぼんやり馬房が明るい？ 私が光つてるの

???

——ドクンツドクンツドクンツ

私の身体を光の粒子が包み込んでいく。顔が熱くなり耳が聞こえなくなっていく、周りは真っ暗で、でも色紙の女の子ははつきり見えて、絵が光を帯びている??

——ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ、ドクツ！ドクツ！ドクツ！怖い、助けて、ボス、コタロウ、テキ、国崎さん、声が出ない、息が出来ない、視界が、世界が傾き回る

——ドクツ！ドクツ！ドクツ！ドクドクドクドク————!!!!

視界が大きく揺れて、目の前に寝藁が広がって——、私の意識はそこで消えた。

『チョコ！おいチョコどうした！何があつた!?』

遠くで誰かが呼んでる声がする。ゆっくりと視界が開けて行く。

『チョコ！しつかりしろチョコ!! 大丈夫か？頼む！返事をしてくれ!!』

目の前に広がるのは寝藁の色、鼻をくすぐる感じがする。私倒れてたの??

『チョコ！大丈夫か？頼む！返事をしてくれ!! クソつ！廐務員！廐務員はどこか!!』

ゆっくりと起き上がるうとして、視線の高さに違和感を抱いた。起き上がったはずな

のにどうしてこんなに視線が低いのだろうか？

『チヨコ！チヨコ!!返事してくれ！何があつた!!!無事なのか!!』

ボスが呼んでる。すごく心配してる。返事しなきや……

「ボス、私は大丈夫だよ。ちょっと眩暈がして倒れただけで怪我とかはして——、えつ

？」

声が変だ。高さも声を出すところも変だ。まるで——。

『!?お前は誰だ!!人間が何故チヨコの馬房に居る!?』

ボス、何を言つてるの？?といいかけて下がつた視線、その視界に写る前脚は——、まるで人間の様に白く、短く、蹄が5本に分かれていた。

「ひいいつ!?脚が!!私の前脚がつつ!!」

恐怖のあまり私は再び倒れ込む、身体が見える。まるで人間みたいに布に包まれた細くて小さな身体が、前脚よりも長くて少し太い後ろ脚が、毛の生えていない白い肌のむき出しの脚が——。

「やだあ！やだあああ！助けて！助けてえええ！」

必死に四本の脚を動かして這うように馬房から出る。低い姿勢のおかげで入口からは簡単に出れた。

『おい！貴様！誰だ！何故チヨコの馬房に居る！チヨコに何をした！』

見上げれば遙か頭上にボスが居た。耳を絞り、見た事の無い形相を浮かべてる。こんなに怒つてるボスは初めて見た。

「ボス！ 私だよ！ チヨコだよ!! 信じてよ!!」

『おい！ 人間のガキ！ てめえ！ チヨコに何しやがった!!』

コタロウが顔を出して私に威嚇する。コタロウも耳を絞り目を血走らせて吠える。

「コタロウ！ 私だよ！ チヨコだよ!! 信じてよ!!」

『黙れ人間!! メスガキがピーピー甲高い声で鳴くな！ 踏み潰してやるぞ!!!』

コタロウに私の言葉が通じない。どうして、どうして。

ボスが怖い、コタロウが怖い。助けて――、助けて――。

『ボス！ コタロウ！ お願ひ!! 信じて!! 私はチヨコだよ!!』

『……!?』

『!?!』

二人の嘶きがピタリと止まる。それにさつきの私の声、もしかして――。

『ね、ねえ、一人とも私の声わかるの？』

『ああ、分かる。その声確かにチヨコだ』

『人間のガキがウマの言葉話せるわけない。姿は変だがその声は確かにチヨコだ』

よ、よかつた。私は力が抜けてそのままへたり込んでしまう。通路の地べたがヒンヤ

りとして気持ち良い。

どうやら、今の私は人間の言葉と馬の言葉両方喋れるみたいで、ボスやコタロウと話したいと強く意識すると馬語に切り替えるようだ。

『良かつたああ、信じて貰えて。ねえボスこれは一体何。私はどうなつちやうの?』  
『いや、俺も分からぬ。馬が人間に変身するなんて聞いた事無いからな』

そんな、ボスにも知らない事があるなんて。私これからどうなるんだろうか?

『ところで、なあチョコ。お前いつまでその姿勢なんだ?』

コタロウが不思議そうに聞いてくる。姿勢? 何の事だろう?

『お前、今人間の姿なんだろう? 人間なら二本足で立つもんなんだが。人間の格好での姿勢は辛くないのか?』

そう言われてみれば後脚を途中で折つて四本脚で居るのは確かに辛い。かと言つて後脚を伸ばすと前のめりになつてさらに歩きにくく息するのもつらくなる。

『確かにそうだな。チョコ、試しに二本足で立つてみろ』

『立つてみろつて言われても……』

ボスにやつてみろと言われても、二本脚で立つなんて考えたことも無かつた。

『不安か? ちょっと見本見せるから待つていろ。——ツセイヤツ!!』

ボスがそう言うと馬房の前で向きを変えひと際嘶くと前脚を振り上げて馬房の壁に

当てて2本脚で立ち上がる。前脚を上げたボスとてもカツコいい——！

『ゼエゼエ、馬と人間では違うかもしれないがイメージ的にはこんな感じだ』

『うん、わかった。私やつてみるよ』

『じゃあやつてみろ。両腕——前脚を上げたらこここの門に付けるんだ』

ボスの言われた通りに身体の向きを変えて、ボスの馬房の入り口の棒に向かつて両前脚を振り上げる

『うん。じやあ行くよ！セイヤツ！』

両前脚が棒に付くとその勢いのまま後ろ脚を伸ばすと自然と二本足で立ち上がる事が出来た。普段の馬の時と同じくらい視界が高い。

『おおお、チヨコが立った！』

コタロウが驚きの声を上げる。二本脚で立つのってなんだか不思議な気分。

『さすが人間の身体だな』

『う、うん。でもなんだかフラフラしてちよつと——キヤアツ!?』

『チヨコつ!!』

前脚を門から離した瞬間、後ろに倒れそうになる。とつさにボスが私の前脚を咥えて引つ張り上げてくれたおかげで倒れずにすんだ。

『ボ、ボス。ありがとう』

『気にするな。人間は俺達馬と違つて簡単に一本足で立てるが細長い体のせいでバランスが悪く転びやすくなることがある。慣れるまでは気を付ける。手摺を握るんだ』

『握るつて?』

『お前のその前脚、人間では腕と言うがその先に手があり先端には5本の指がある。これ自在に動かして物を掴んだりする。慣れればとても便利だ。俺達馬が出来ない事を何でもできるようになる』

ボスに言われた通りに指を動かしてみる。なんだか蹄が5本に増えてそれぞれ自由に動くのはなんだか氣味が悪い。

んしょ、んしょ、んしょ。

ボスに言われて私は一本足で歩く練習をしてる。最初の頃はフラフラしていた足取りもしばらくすると普段歩く時の様に真っ直ぐ歩けるようになつていた。

『歩行はもう問題ないようだな』

『うん。前脚を使わずに歩くなんてなんだか不思議』

ボスが満足そうに頷いてる。

『じゃあ頼みがある。チョコ、俺の馬房の門を外してくれないか。外に出たいんだ』

『ええっ!? それって大丈夫なの?』

『構わないさ。ここから逃げ出すわけでは無いからな』

『……うん、わかつた。じやあするね』

ボスに言われた通りに私は門を掴んで横に引っ張る。するとあっけなく門は外れて入口が開きボスが出てきた。私達の馬房つてこんなに簡単に開いてしまうんだ。

『ふう、やつと出れた。チヨコ、付いて来てくれ。行きたいところがあるんだ』

ボスが私の横に来てそうつぶやく。どこへ行くんだろうか。

『ねえ! ねえ! 僕のこと忘れてない!? 頼むよ~俺も出してくれよ~』

後ろでコタロウが騒ぐ。どうしようかとボスを見ると。

『駄目だ。お前は何処かへ逃げ出すつもりだろ? 開けるわけにはいかない』

『ええー!! そんなー!! ボス!! お願ひ!! ここから出して!! 俺も連れて行つて!! 勝手にどこにも行かないから!! チヨコツ! お前からも頼むよ~』

馬房の壁を叩きながらコタロウがごねる。

『わかつた、わかつた。お前も出してやるから煩くするな騒ぐな。チヨコすまない、コタロウのどこも開けてやつてくれ』

『うん、わかつたよ』

私が門を開けるとコタロウが嬉しそうに飛び出してきた。

『イヤツホオオオオオオオ!!俺は自由だ!!!もう人間達になんぞに縛られないぞ!!』

『コタロウ——。』

『ひいい!?ごめんなさい、冗談です……』

後ろ脚を蹴り上げたり、前脚を振り上げたりして跳ね回るコタロウをボスが一喝する。ボスに睨まれ小さい馬体のコタロウがさらに小さくなつてしまつた。そのまま私の横に大人しく並んだ。

『よろしい。ではお夜食タイムといこうか』

ボス、私、コタロウと並んで厩舎の中を歩いていくと何かの部屋に着いた。物がたくさん置いてあつていい匂いもする。

『ここは俺達のエサを置いてる場所だ。チヨコ、悪いがそこの袋を持ってきて、この容器に中身を入れて欲しい』

ボスに言われて私はエサの袋を運んで来る。ボスの指示通りに手を使って運び、袋の口を開けて容器へと中身を移していく。

『もう手の扱いは完璧ようだな。飲み込みと憶えが早い、さすがチヨコだ』  
『えへへへ、ありがとうボス!ボスの教え方が上手いからだよ。人間の前脚、手つてすごいね!何でもできるよ』

『チョコお〜、俺にもくれよ！あつ出来れば人参が良いなあ』

バスのを見てコタロウも催促してくる。人参はどこにあるんだろう？『人参ならそこの冷蔵庫の中だろう。チョコ、目の前の銀色の扉を手を使って開けるんだ。中にニンジンがあるはず』

バスに言われて、すぐ目の前にある銀色の扉を手を使って開けてゆく。中は明かりが灯りヒンヤリしてて気持ちいい。人参が置いてあつたので何本か取つてコタロウの容器へと入れていく。

二人のを見てたら私も何だかお腹がすいてきたので同じようにエサを容器に入れて行く、ニンジンも用意して——、本当はリンゴが欲しかつたけど冷蔵庫の中には置いてなかつた。

『では食事としよう。 いただきます』

『いただきます』

二頭がエサを食べ始めるのを見て私も食べようと顔を入れて——

『あ、あれれ？顔が入らない……んんつぐぐぐぐぐつ、届かないっ!?』

『チョコ、お前何やつてるんだよ』

コタロウのあきれた声が聞こえてくる。人間の顔、丸くて横に広くて首が短いから容器の中のエサが食べれない。

『チョコ、人間は俺達と違つて直接口では食べない様になつてゐるんだ。本来は食器と言ふ道具を使うんだが……今日は手を使つて食べなさい。両手でエサを掬つて口元に近づけて食べるんだ』

私はボスに言われて両手を使つてエサを取つていく。ボスの説明通りに手を動かすと、エサがこんもりと両手に乗り口元に近づいて行く。これなら食べやすい！

『いただきまゝす。…………んぐつ、んぐつつ？ぶぶつ！ぶえつ！ぶえつ！……ゲホツ！ゲホツ！』

口にエサを入れた瞬間、私は盛大にむせてしまつた。エサが、普段食べなれているはずのエサがまるで砂のようで味も苦くて口の中に張り付き食べれない。

『ううう、エサが食べられない、砂食べてゐみたい……』

『ふむ……。チョコ、どうやら今のお前は人間の味覚になつてゐるようだ。だから俺達と同じエサを食べる事が出来ない。ここには置いてない人間用のエサが必要だ』

ボスが残酷な宣言をしてくる。私、どうやつてエサ食べればいいんだろうか。

『あ！人参なら食えるんじやねーの？人間も人参食うだろ確か』

コタロウがそう言い、時々廄舎にお手伝いで来てくれる人間の男の人人が、人間のエサの時間の後に廄舎にやつて来ては「人参いらないよ」つて言つて小さい人参の欠片をよく私達に分けてくれていたのを思い出した。

『そうだな、人参なら食べれるかもしれん。チヨコ、試しに食べて見ろ。両手で人参を持つて口に近づけてそのまま齧つてみるんだ』

ボスに言われて人参を両手で持つたまま口に近づけて食べる。ガブツ……ガリツ……

『ううう、固くて食べられない、頬や歯が痛いよ……』

人参つてこんなに硬かつたけ？何度も必死に齧りつくけど少し欠片がとれたくらいで挫折してしまった。

『噛む力も人間相当なのか……仕方ない、少し汚いが許せ』

そう言うとボスは私のエサ箱にニンジンを何本か入れると前脚を入れて踏み潰していく。

『これなら食べられるだろう？』

グチャグチャに潰れた人参を渡され、手で掬つて口元へ運ぶ。シャクツ……シャクツ……。まだ少し硬いけど小さな塊ならかみ碎くことが出来た。

『美味しい……。ボスありがとう、これなら食べられるよ』

『良かった。ただ毎回潰すわけにはいかない。本来なら包丁と言う道具が使うのだがとても危険な物だからさすがにまだお前には教えない。次は人間用のエサを探そう』

ボスがそんな事を呟いてる。人間用のエサはどこにあるんだろうか？不便だなあ

……。

そんなことを考えつつ、三頭一緒に楽しく夜のお食事を楽しんだのであつた。

『チヨコ、これからどうするんだ?』

お夜食会が終わつて片づけをして馬房に戻つた後、隣から首を伸ばしたボスに問われる。

『ボス、私どうなつちやうの?』

私はまだ人間の姿のままだ。いつまでこの姿なんだろうか? 馬の姿には戻れるのだろうか?

『人間達が起きてくる前に姿が戻れるようになれば良いのだが…』

『別に人間のままで良いんじやねえの? 人間になれば鞭で叩かれて走らされなくて済むし、手が使えるから便利だし』

考え込むボスに、呑気な事を言うコタロウ。馬の姿に戻れないのは辛いけど、厳しいレースに出なくて済むのなら良いのかな?

『いやそれは不味い。このまま馬の姿に戻れないで人間に見つかってみろ。馬のチヨコ

エクレールが消え、代わりに見知らない人間の女が馬房の中に居る。大騒ぎのどころではないぞ』

『そうなの?』

『ああ、だがそれだけで済まない。問題はお前の姿だ』

『私の姿?』

『今のお前の姿は人間であつて人間ではない。人間には馬の耳と尻尾が無いからな。人間に近い未知の存在。そんな存在が居たら、ただでは済まない最悪の事態がまつている』

『さ、最悪の事態……??』

『お前は人間達に連れ去られて何処か遠くの施設へ行く。そこで身体をバラバラにされ、隅から隅まで調べられるだろう。——生きてここへ戻つてくる事はもう無い』

『!!!』

『そんな、そんな、折角頑張つて生きて来たのに——、ここまでやつて来れたのに——。

『そんな!! チヨコの奴必死に頑張つて来たのに! もう二度と離れ離れにならない様に来たのに!! そんな事つてありかよ!! クソッ人間どもめ!! チヨコ!! 早く元の姿に戻るんだ ! 急げ!! 急げ!!』

コタロウが必死に叫びながら私に急かしてくる。

『チョコ、落ち着け、あわてるな。人間の姿に変身した時のことによく思い出すんだ。何をした？何が起きた？覚えているならそれをもう一度やつてみるんだ。恐らく同じ方法で戻れるはずだ』

『う、うん……』

私は馬房に飾られた絵を見つめる。この絵を見つめてたら変身したんだ。

——お願い！私を元の馬の姿に戻して!!!

強く何度も祈り続ける。でも、でも、何も起きない。目が離せなる事も、あの身体が熱く脈打つ感じも、纏う光の粒子も——、何も、何も起きない！

『チョコ!! チョコツツ!!! まだか！ まだ戻れないのか!!!』

『騒ぐなコタロウ！……チョコ、落ち着け、落ち着いて続けるんだ』

『で、でもボス、何も起きないよ！ 何も起きないの！』

『焦るな！ まだ諦めるな、必ず戻れるはずだ！だから——』

そう言いかけたボスの言葉が止まる。厩舎に一斉に明かりが灯つたからだ。人間達が来たんだ!!!

『しまった！ 時間が来たのか!?』

『チョコお!! まだかよお！ まだ馬にもどれないのかよお!!』

ボスが焦りの声を上げ、コタロウが悲鳴のような叫びを上げる

「ん？ 何だ何だ？ 妙に騒がしいな？」

足音と人間の話し声が聞こえてくる。テキたちがやつてきたんだ。

私は絵を見つめ必死に祈る。でも何も起きない！

『ボスう！ どうしよう!! 私まだ戻れないよお!!』

『チョコ！ 落ち着け！ まだ諦めるな!! コタロウ！ 騒いで暴れるぞ!! 時間を稼げ!! 人間達をチョコの馬房へ近づけさせるな!!』

『わかった!!! おい!!! 人間ども!!! 近づくな!!! チョコのところへ行くなああ!!!!』

『テキ!! 賴む!! まだチョコのところには行かないでくれ!!!』

ボス達が暴れて大きく嘶く。振動と埃が舞い、壁を蹴る音が響き渡る。

「くそっ！ 何が起きてるんだ!! コタロウ!! ブルドック!! どうしたんだ!! 落ち着け！ 暴れんな!!」

「どー、どー、どー、二頭とも落ち着け！」

テキたちの声がはつきり聞こえてくる。外では騒ぎを聞きつけたのか他の廄舎の人間達が近づいてくる音もし始めた。でも私の身体はまだ戻らない。

「……？ テキ、チョコの馬房が変です。妙に静かなんです。ちょっと見ていきます！ コタロウとブルドック頼みます」

「ああ、確かにさつきからチョコだけ反応がないな。そつちはお前に任せた！ ……」

よおーし、よおーし、二頭とも落ち着くんだ!!』

『まずい！チヨコ!!国崎がそつちに行つた!!まだ戻れないのか!!』

国崎さんの足音が近づいてくる、まだ、まだ私の身体は戻らない。  
お願ひ!!早く!!早く私を元の身体に戻してっ!!

——ドクンツ

来た!!

——ドクンツ、ドクンツ

この感覺、この鼓動——、身体が熱い。

——ドクンツドクンツドクンツ

目を開ければ、身体がうつすらと光を帯び始めていた

——ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ、ドクツ！ドクツ！ドクツ！

お願ひ!!間に合つて!!

——ドクツ！ドクツ！ドクツ！ドクドクドクドク——!!!!

国崎さんの足音と気配が目の前に来たのと私の身体と意識が光にのみこまれていく  
のが果たしてどちらが早かつたのだろうか——。

「チヨコ！がんばれ！死ぬんじやないぞ！がんばれ！がんばれ！」

誰かが呼んでる。身体を揺すってくれてる。

「チヨコ！チヨコ！生きるんだ!!生きるんだ!!」

ゆっくりと目を開ける、目の前に人の姿が見える

「おお！目を開いたぞ!!もう少しだ!!がんばれ！がんばれ！」

国崎さんだ。私の担当厩務員——、私は——。

意識が戻る、鮮明に目の前の景色が見える。記憶が、昨日晩の記憶が蘇る！そうだ！

私は人間の姿になつていたんだ!!見つかつたら終わりだ!!

「ヒヒイイン——ブルルルツ!!」

恐怖のあまり思わず立ち上がる。高い視線、寝藁が纏わりつく四本の脚の感覺——。

「ヒイイン……？」

鳴き声が、身体の感覚が懐かしい。私、馬に戻れたんだ!!!

「チヨコ？大丈夫なのか？」

国崎さんが心配そうに私を見つめる。大丈夫だよ、そう伝えたくて彼の顔に頬を摺り

寄せる。

「おおっ、よかつた……本当に良かった……まったく、心配したんだぞこの野郎う……」

私の髪を首筋を優しく撫でてくれる国崎さんの涙声を聞きながら私はホッとしたのだつた。

## chapter. 2 「深夜のお茶会」

美浦トレセン競走馬診療所。

規則正しく一定のリズムを打つ機械の音を聞きながら私は診察を受けた。

獣医さんが何度も難しい顔をしては首を捻り、機械や検査の道具と睨めっこしているのを眺めながら「今日は随分お注射されたなあ」とぼんやりと考え方をしていた。

「御手洗先生、チヨコエクレール号ですが、検査の結果特に異常はどこにもありませんでした。すべて正常値です」

「そ、そうでしたか……」

「よ、よかったです……」

緊張しきっていたテキと国崎さんの表情が緩み、二人から安堵のため息が漏れる。私もそれを聞いていて一安心した。

「ただ、僅かですが疲れがまだ残っているように見受けられます。念の為もう2、3日は調教はぜずに軽い運動のみでビタミン剤と水分を多めに与えて小まめに様子を観察し

ていてください。何かありましたら直ぐに連絡を』

『「ありがとうございました』

テキ達がお礼を述べ、私も一緒に軽く頭を下げて会釈をして帰路についた。

診療所を出ると既に周りは暗くなり始めており、厩舎に帰ると私よりも検査と診察が終わったボスとコタロウが帰っていた。

『あ！ チョコ!! お帰り〜!!』

『おかえり、 チョコ』

『ふたりとも、 ただいま』

ふたりの馬房の前を通り過ぎる時に見えた、 ふたりの脚に巻かれた分厚い包帯が目に入る。胸が締め付けられるような思いになつた。

『チョコー・チョコー！ 大丈夫だつた？ 人間達に何か変な事されなかつた？ バラバラにされそうにならなかつた??』

国崎さんに曳かれ馬房に入つた後、 通路側へ顔を出すとコタロウが首を伸ばして聞いてくる。

『うん。 大丈夫だつたよ。 念の為に細かい検査受けたから時間がかかつたの。 どこも悪

くなかつたから心配ないからね』  
『よ、良かつたあああああく……』

気が抜けたようにズルズルと首が下がり入口の門にもたれ掛かるコタロウ。それも見た国崎さんが慌ててコタロウに駆け寄っていた。

「コ、コタロウ!? どうした!? 大丈夫か!? 脚痛むのか!?」

『うわっ!? 何だよもうつ!! びっくりするじやないかあ!!』  
コタロウと国崎さんがやいのやいのと騒いでいるのをバックに、私はボスに話しかけた。

『ボス、今朝はありがとう。それからごめんなさい……。私のせいでもボスとコタロウが……』

ボスとコタロウは私が馬に戻る為の時間を稼ぐために馬房内で暴れて騒いだため、脚を痛めてしまった。幸い骨折まではならずに済んだものの打撲と蹄に少しヒビが入ってしまい、特にコタロウは症状が重くて、年内に走る予定だったレースをすべて出走取消することになってしまった。

『気にするな。あれはチョコのせいじゃない。』

『でも……』

『チョコ――』

ボスが私の目を強い力でじつと見つめる。

『お前がもし馬に戻れなかつた時、その時起こる事、起こる結果を考えれば、このくらい大したこと無い。お前は大切な家族・兄弟だ。その家族兄弟を失う最悪の結果になつてから後悔はしたくないんだ』

『ボス……』

『そーだよ!!俺もチヨコが居なくなるなんて嫌だから頑張つたんだよ。だからヘーキ!!あつ、ボスから聞いたんだけど俺しばらく人間乗せて叩かれながら走らなくつて良いんだつて!!!タンキホーボク』って奴に行けるらしいし、ゲートや馬房に閉じ込められずにのんびりできるから嬉しいんだ!!』

『ああ、コタロウ、言い忘れていたが、短期放牧行くのはお前だけな。俺とチヨコはここに残る』

『えええ———!!何で!?ボスとチヨコも来るんじやないの!?俺ひとりなの!?ヤダ———!!ヤダ———!!』

「おいおい、コタロウ暴れるな!!……いてつ!いてつ!噛むな!服引つ張るな!!」

賑やかな厩舎内に思わず笑いがこみ上げる。とても癒される……。ふと、ボスが私を見つめていることに気づく。

『ボス?どうかしたの?』

『チヨコ、一つ聞きたいことがある。——お前、人間の言葉が理解できるようになつていいな?』

『うん……』

私は頷く。実は今朝、馬の姿に戻つてから、私の身体には一つ変化が起きていた。

それは人間の喋る声が鳴き声では無くて言葉として、ちゃんと会話として私の耳に入り脳が理解している事だつた。

それはとても驚きで最初はまだ馬に戻れてなくて人間の姿のままなのかと自分の身体を何度も確かめたりした。

次にもしかして自分が人間の言葉が喋れるようになつたのか?自分の鳴き声が人間に言葉として、声として伝えられられるのかと思い、何度も国崎さんやテキに話しかけて見たものの、鳴き声としか認識されず会話は出来なかつた。

『他に何か変わつたことは無いのか?』

『うん、他には何も変わつてないと思う』

馬房に飾られた絵をもう一度見つめてみる。昨晩のように身体が光つたり熱くなつたりと変身の前触れのような事は起きなかつた。

「よし、大丈夫だな。じゃあおやすみチヨコ」

私の身体を丹念に撫でてくれた国崎さんが最後に首筋と鼻先を撫でて、立ち去つてい  
く。厩舎の照明が落とされ、暗闇に包まれる。

暗闇にぼんやり見えるあの絵をもう一度見つめる。でも何も起きなくて、昨日のあれ  
は何だったんだろうかと思つていると――。

『チヨコ！チヨコ！まだ起きてる？……もう寝ちゃった？』

『まだ起きてるよ。どうしたのコタロウ？』

コタロウの呼ぶ声が聞こえたので通路側から首を出すとコタロウがこちらに首を向  
けていた。

『ねえ、チヨコ。今日は変身しないの？』

『え？』

コタロウにそんな事を言われて私は一瞬固まってしまう。変身つてあの事だよね？

『コタロウ、お前、今朝の事もう忘れたのか？』

ボスが呆れたように呟く。

『忘れてないよ…………でも今日一日じつとしててものすごく暇だつたし、これからしば

らくはこんな感じが続くんでしょう？ううう……外出たいよお……。だからチヨコが変身してくれたらまだ外出れるし楽しいかなって』

『お前なあ……』

『うううう……、ねえチヨコお願ひ！また変身して！で一緒に外出ようよ！人間達の事は大丈夫。また俺達が何とかするからさあ!!』

そんな事言われても、また変身できるとは限らないし、もし今度戻れずに人間達に見つかつたら——、ボスやコタロウに何かあつたら——。

『チヨコ、お前はどうしたい？』

ボスが私に問い合わせて来る。

『…………』

——実は私自身はもう一度変身してみたいと思う気持ちがあつた。あの馬から人間に変化する時の感覚、人間体の時の感触、その事に少し楽しさを感じてる自分が居る事に気づいたからだ。

『出来るならもう一度あの姿になつてみたい。——でも良いの？またボス達に迷惑いっぱいかけてしまうかもしねいよ？』

『大丈夫だよ！俺達が何とかするよ!!』

『まあ、何とかなるだろう』

私が答えるとボス達はそう返事してくれる。そこまで言つてくれるなら——。

『うん、わかつたよ。じゃあもう一回変身してみるね』

『やつたーー!!』

コタロウのはしやぐ声を聞きながら私は飾られた絵を見つめ、もう一度祈る。昼間もさつきも何も起こらなかつたけど——、

——ドグンツ

……來た。

——ドクンツ、ドクンツ

何かが流れ込み、身体が熱くなり奥底から湧き上がつてくる感覚。目を開ければ馬体が光を纏い始めていた。

——ドグンツ！

ひと際強く衝撃が来る。一瞬意識が飛び、思わず倒れそうになる。景色が傾き、床が近づいて——。

——私は咄嗟に手を出した。

「えつ——？」

目の前に見える二本の白く細い腕、寝藁を掴み握る蹄とは違う手指の感覚と感触。

「私！また人間になつた！変身できたんだ！」

『えつ!?』

『その声……まさか』

私は通路側の入り口に駆け寄り、そのまま門を潜り抜けて通路へ出る。

『コタロウ！ボス！私、変身できたよ！』

その場でクルリと回る。馬の時では出来ない動きだ。

『やつたーーーじゃあ早く開けてよ!!』

『全く……、今日もお夜食タイムだな』

今日もボス、私、コタロウと並んで厩舎の中を歩く。確かにこの辺が私達のゴハンを置いてある場所……。

『アレ？ボスここじゃないの？』

私が疑問を口にする前にコタロウが尋ねた。

『今日は先に人間の、チョコの食べれる物を探そう』

暫く進み通路の突き当りまで来た。目の前には「休憩所」と書かれた扉がある。ふと見るとボスがあちらこちらを何かを探すように嗅ぎまわっている。

『…………チョコすまない、その木箱を持ち上げてどかしてくれないか?』

ボスに言われて通路のわきに置いてあつた木箱を持ち上げてみる。するとそこには白い小さな容器が置いてあり、中には何か固いものが入つてあつた。

『それはこの扉を開けるために必要な”鍵”と言うモノだ。手に持つてこの”ドアノブ”にある”鍵穴”に入れて回すんだ』

ボスに言われて”カギ”と呼ばれる物を手に取る。ヒンヤリして冷たいそれには鈴が付いていてチリンチリンと音を立てていた。”鍵穴”と呼ばれるところに差し込んで回すとカチリツと音がした。

『あ! 何か音がしたよ!』

『開いたな、チョコ今度はそのドアノブを回してくれ』

今度は鍵を入れた部分、”ドアノブ”と呼ばれる部分をゆっくりと回すと扉が開いた。奥には部屋のようなものが見える。

『ねえねえボス、ここは何の部屋?』

『ここは人間達が少しの間休むところだ』

『休むところ？こんな狭くて物がいっぱいあつて、寝藁の無い固い所で人間は寝てるの？』

『いや、人間が寝るところはまだ他にあるんだ』

ボスとコタロウの話し声を聞きつつ、私はゆっくりと足を入れて部屋の中へ入る。狭そうに見えたが人間の身体だと特に不便なく過ごせそうだ。

『チヨコ、その白い扉を開けてみてくれ』

『うん』

ボスに言われて目の前の白い扉を開けてみる、中には明かりがともりヒンヤリした空気が流れ来る。昨日ボスが言っていた”レイゾウコ”と同じものようだ。

中には色々な物が入っている。

『ボス！中に何か入っているよ』

『多分ジユースとかだろう。何本か取り出して見せてくれ』

私はとりあえず何本か取り出してボスに見せて行く。

『それはリングジユースだな。それはオレンジジユース、……それはコーヒーか、それは戻しておきなさい』

ボスに見せて良い物は置き、駄目と言われたものは戻す。コーヒーと”オチャ”はどうして駄目なのだろうか。

『次は食べ物だな、となりの棚を開けてみてくれ』

『白い』レイゾウコの隣にある木でできた棚を開けてみる、すると何やら白い紙に包まれた箱が二つ置いてあつた。なんだかどちらも甘い香りがする。

『ボス、これはなあに?』

『これか、これは煎餅とクツキーだな。人間が食べるオヤツだ』

『オヤツってあのエサに時間以外に貰える奴?』

ボスが答えてコタロウが不思議そうに眺める。

『他に何かありそうか?』

『うーんと……何だかよく分からぬ物ならあるけど、この箱以外には食べ物らしいものはないよ』

私がそう答えるとボスは少し考えるそぶりをして

『チヨコ、すまない。どうやらここにはちゃんとしたゴハンになるものは無いようだ。オヤツになつてしまふが構わないか?』

『うん、良いよ』

ボスもコタロウも私のためにずっと食べるのを我慢してくれてる。わたしのわがままにふたりをいつまでも付き合わせるのは何だか悪い気がした。

『たとえオヤツでも馬の時には食べられない人間の時にしか食べられない物なら十分嬉

しいよ。さあ行こう』

箱とジュースの容器を持つてわたしたちはまたあの部屋に行くことにした。

『では召し上がる。頂きます』

『いただきまーす』

三頭一緒に夜のお食事会。ボスには飼料と呼ばれるご飯を、コタロウには人参を、私はクツキーとおせんべいとジュース。

それぞれ並べて三者三様の音を立てて頂いていく。シャクシャク…、ボリボリ…、パリパリモグモグ…。

『チョコ、美味しいか?』

ボスが聞いてくる。

『うん、このクツキーとおせんべい、初めて食べたけどとても美味しいね。ただちよつと口が乾いて、んつぐぐぐ…』

『チョコ落ち着け。飲み物と一緒に食べるんだ』

ボスがジュースの容器を咥えて渡してくれる。ボスが教えてくれたやり方で蓋を開けて、手に持ち、口へ持ってきて中身をゆっくりと流し込んでいく。

普段と違い自分の顔を容器に近づけるのではなくて、手に持った容器の方を自分の口

に近づけて飲む。人間の水の飲み方は独特だ。

『くんくん……これはリンゴの匂いかな？変だよね、水なのにリンゴの味と匂いがするなんて』

『うん』

このジュースと言う水。普通の水みたいなのに色が付いていて、いろんな色いろんな味があるのだ。

『すべての果物と大体の野菜はジュースになっているな。リンゴ…バナナ…ニンジン』

『ニンジンッ！』

コタロウが目を輝かせてこちらを見て来る。

『ニンジン!!ニンジンの水…ジュースがあるのっ?!?』

『あ、ああ……あるぞ、チョコの横に置いてる…』

『チョコ!!チョコ!!ニンジン!!ニンジンのジュース頂戴っ!!!』

ボスが勢いに押されてたじろくくらい私の視界いっぱいにコタロウが顔を思いつきり寄せて来る。床を激しく前掻きをし、鼻息はレース直後みたいに荒い。

『チョコ……、お前の横に置いてる』 佐藤園 無添加ニンジンジュース100% をコタロウに飲ませてやつてくれ……』

『う、うん……』

ボスに言われて私はニンジンジュースの容器を手に取る。蓋を開けて、口をコタロウの方へ向けると勢いよくコタロウが齧り付いた。

——ゴキュツ、ゴキュツ、ボコツ！ベコツ！バキツ！

『恐ろしい勢いの飲みっぷりだな……』

容器の中のオレンジ色の液体が恐ろしい速さで消えて行き、容器が派手な音をたてて潰れて行く様子をボスと一緒に眺めていた。

『……ングツ！ プペーツ!! おいしかったああああ！！ とつても甘くて味が濃くて!! 少しドロツとしてたけどお水みたいで良かつたあ!! ねえ!! チョコ!! もう一個ちょうどいい!!』

空になつた容器を放り投げて満足そうなコタロウが次を催促してくる。周囲に置いてある容器を見てみると”ニンジンジュース”と書かれたものもオレンジ色の液体が入つた容器も見当たらなかつた。

『ごめんねコタロウ。もう無いの。さつきので終りみたいなんだ』

『えええ——！……そんなああ』

さつきのハイテンションから一気に落ち込んでしまったのかトボトボの自分の容器に前に戻り座り、しづぼくれながら容器に残ったニンジンを齧るコタロウ。『味が薄いよ……あつでも食べ応えはあるから普通のニンジンも悪くはないのかなあ…』と声が聞こえていた。

『んぐ…チヨコの食べてるソレ、不思議な匂いがするね』  
コタロウが私が食べているクツキーを見つめている。同じ見た目でも何種類か味の  
違いがあるみたい。

『ねえ、チヨコ。一個ちようだい』

『いいよ』

私がクツキーをコタロウの鼻先に近づけると

『だめだ、チヨコ、そのクツキーはコタロウには食べさせてはいけない』  
ボスが真顔で厳しい事を言つた。

『ええええーー!!どうして?』

コタロウが非難の声を上げる。

『人間の食べ物には、俺たち競走馬には食べれない物、食べてはいけない物がある。最悪  
は毒があつて身体を壊したり、命を落とすこともあるんだ』

『ひええええ!! そうなの? チヨ、チヨコは食べてても大丈夫なの??』

青ざめた表情になり慌てるコタロウ。私も少し不安になる。

『ボス、私これ食べても大丈夫なの??』

『ああ、今の人間に変身してる時は大丈夫だろう。馬の時はダメだからな』

そうなんだ。良かった……あと馬の時は気を付けよう、うつかり食べたら大変だ。

『人間は俺達馬や他の動物たちが食べられない物をたくさん食べる事が出来る存在なんだ』

『へえーそうなんだ。人間になれるチヨコが羨ましいなあ～』

ボスの説明にコタロウが私の方を見ながら呟く。そう言えばどうして私だけなんだろうか？

『ねえ、どうして私だけ変身できたのかな？』

私がふと呟く。

『？』

ボス達がこちらを不思議そうに見つめる。

『本当に人間の姿に変身できるのは私だけなのかな？もしかしたら、コタロウやボスも変身できるのかも。あの絵を見つめて祈つたら――』

夜のお食事会を終えたわたしたちは馬房に戻ってきた。

私は自分の馬房に飾つてあつた絵を外してボスとコタロウの前に持つて来てみた。

『これが……』

『これがチョコの絵なの？』

『うん、この絵を見つめて強く祈ると私はこの姿に変身できるの』

ボス達が絵を覗き込んでいる。

『どうかな……何か来そう？』

『うーん……』

ボスが真剣に見つめかなり悩んでいるみたい。

『何も起きないよ。ねえ、祈るってどうするの？』

『うーんっと、この絵を見つめながらとか、あとは目を瞑つてとても力を込めながら”お願いします変身させてください”っていう感じかなあ？』

コタロウが聞いてくるので普段私が変身する時の事を思い出しながら答える。

『力を込めて……強く言う……。フンッんんんんツツツツーー!!お願いします!!!俺も!!  
チヨコみみたいに!!人間にじでぐだぎいいいいいい!!』

コタロウが充血した目を見開き馬体を震わせて鼻息を盛大に噴きだしながら力む。  
彼の後ろからボトッ！ボトッ！ボトトトッ！と音がするので覗いてみると盛大にボロ  
が出ていていた。

『もういい、やめろやめろ！コタロウ、ボロが盛大に漏れ出てるぞ……』

『へええっ!……ハアハアハア……本當だ……うわつ……やつちやつた……。ねえ、チヨコ?俺どこか変わった?変身できそう……??』

馬体に白い泡だつた汗を浮かべて、息も絶え絶えに聞いてくるコタロウ。

『コタロウ、ごめんね。全然変化ないよ……』

私が申し訳なさそうに答えると「そ、そんなあああ……」と力なく項垂れるコタロウ。思いつきり力んだ後に一気に脱力した影響なのか、ジヨジヨジヨ……と後ろ脚の間から足元に向かい黄色い水溜りが広がっていく。

『どうやらこの絵自体には何も効果も力もないようだ。何も感じないしどこからどう見てもただの普通の紙に普通の人間が普通の道具を使って書いた普通の絵だな。』

絵に鼻を近づけて念入りに睨むように調べていたボスが顔を上げてそう答える。そんなはずはない、確かに私が変身する時、この絵が光を帯びていた氣がするのに……。『おそらく変身する力の源は、チヨコお前自身だ』

『わたし……自身……?』

『ああ、そうだ。恐らくこのイラストは変身発動のトリガー、ただの切欠にしか過ぎない。変身自体はお前自身の力でしているはず』

ボスが私の目を見つめる。

『チヨコ……もう一度思い出せ……、本当に何も知らないのか?本当に心当たりもない

のか?』

私の変身するきっかけ……力の源……なんだろう……何かあるんだろうか……あのイラスト以外心当たりが……

『え?! チョ、 チョコ!?!』

『チョコ! お前身体が……!!』

目をつむり深く考え事していると突然ボス達の慌てた事が聞こえたので目を開けると身体が光の粒子を纏い淡く輝き始めていた。

——ドグンツ

身体に響く音。一見変身した時と同じようで何か違う。まるで力が抜けるような——  
——、力が抜ける——?

『あ、 あ、 ……変身が解ける……』

そうだ、 昨日テキ達に見つかってボス達が騒いでくれて必死に元の姿に戻ろうとして、 身体が光り始めて……その時の感覚だ……。ヒトからウマへ帰る——!!

『コタロウ急げ! 馬房に戻るぞ!!! チョコ!! 間に合うか?! 悪い! 門を閉めてくれ!!』

『あわわわ……急げ急げ!!』

コタロウ達が急いで馬房に戻っていく。私はふたりの馬房の入り口の門を閉めようと足を踏み出して——

——ドクンツ

足がふらつく、うまくバランスが取れない。纏う光がだんだんと強くなつていく。

——ドクンツ、ドクンツ

門を掴む、どんどん手指の感覚が無くなつていく。5本の指が固まつて一つになる感覚——

『チヨコ——!!頑張れえ——!!』

コタロウの馬房の門閉めた。次はボスのだ。

『チヨコあと少しだ!!俺も手伝う!!』

ボスが咥えて息を合わせて門を閉じる。もう指の感覚は無くなり始め、身体を纏う光は一層強さを増していく、光の粒子がタンポポの綿毛の舞い上がる。ヒトの形がもう維持できない——

『チヨコ！チヨコ！』

『チヨコ！頑張れ！あと少しだ!!』

ヨタツヨタツと後ろ脚を踏みしめ、前脚と馬体が下がり始めるのを懸命に押し止め。あとは私の馬房、閉めたままの門の下、潜るだけ——

『間に合つてええ———!!』

最後の力を振り絞り、後ろ脚で床を蹴る。滑るように低く飛ぶように門の下を潜り抜ける。

タアーニンツ

私の前脚の蹄の蹄鉄が、寝藁ごと馬房の床材を大きく叩く音がするのと厩舎の明かりが灯るのはほぼ同時だつた――。

「なんだ、今の大音は……うわっ!? 何だ!…………何で通路にボロがしてあるんだ」  
厩務員の国崎さんの声が聞こえる。少し慌てた様子で私達の馬房を見て回る足音。  
その足音は近づいてきて私の馬房まで来た。

「チヨコは……、チヨコも異常なしか……。んつ？何だ……なんでこの額縁が落ちてんだ？」

国崎さんが私の馬房の中へ入つて来る。 そう言えばボス達に見せるために私の絵の額縁を外してそのままにしていたんだ。

「さつきの大きな音はこの額縁が落ちた音なのか？取り付けが悪かつたのか？……ああ、チヨコ。怖がらせて驚かせてすまなかつたな？心配するな、大丈夫だ」

寝藁の上に落ちていた額縁を拾い上げて飾り直してくれる国崎さん。終わると大丈夫、大丈夫と言いながら私の首筋を撫でてくれた。

——国崎さん、心配かけてごめんなさい。

そう伝わる様に私は小さく「ヒイン」と鳴くのであつた。

# chapter. 3 「真夜中の散歩」

——美浦トレセン 御手洗廄舎 22:00

「それじゃあ、チヨコ、ブルドック、コタロウ、おやすみ」

国崎さんが私達を順番に優しく撫でてくれて、そのまま立ち去っていく。暫くして廄舎の明かりが落ちて暗闇に包まれた。

『…………もう居なくなつたみたいだよ』

『よし、じやあチヨコ、始めてくれ』

『うん、じやあ行くよ』

コタロウが国崎さんが完全に立ち去つたのを確認して、ボスが合図してくる。私は馬房に掲げられた絵、——ウマ娘チヨコエクレールの絵を見つめ、目を閉じそつと祈る。ゆっくりと息を吸う。力が流れ込み、目を閉じているから見えないけど身体が光を纏う感覚を感じる。

今度はゆっくりと息を吐いていく。手足の感触が変わっていく、身体が変わっていく。

最後の一息が口から出たのを確認して、私はゆっくり立ち上がる。

目を開く、視界の高さ、地についた二本の足、5本の指がある細い腕、見慣れないーー見慣れた姿と景色。変身完了だ。

『ボス！コタロウ！変身できたよ!!』

『わあ！もう出来たの!?』

『おおよそ7~8秒か、記録更新だな』

『えへへ、やつたよ』

馬房の出て厩舎の通路でクルリと華麗にターンを決めてボスに教えてもらつた人差し指と中指を伸ばして”ブイサイン”をしてみる。

二回目の変身を遂げた日の朝、私はボスから一つの提案を受けた。

『チヨコ、お前が良ければこれから毎晩変身してみてくれないか?』

『毎晩?』

『ああ、そうだ。その能力は偶然の出来事でも何でもなく恐らく本物だ。お前は人間の

姿になる事が出来る能力がある。なら繰り返し練習する事で変身する時間を短くしたり、変身時に意識を失つたりせずに済むようになる。あとはいくつか調べてみたいことがある』

『調べたいこと?』

『どういう条件で変身と変身解除できるのか?変身した姿をどのくらい時間保てるのか?変身中はどんな事が出来るのか?——他にもあるが大まかにはこんな事だ』

ボスのいう事は一理ある。この能力の事について知らない事が多い。何も分からな  
いまま、不安だらけの中、過ごすよりはマシだ。せっかく身に着けたこの能力、自分  
の物にして何かの役に立てたい。私はそう思うようになっていた。

最初の頃は変身に時間がかかり、ドクンッと身体が脈打ち、暑くなつたり眩暈がした  
りしていたのも徐々に納まり、今では10秒以内に楽に変身できるようになった。  
この数日間、変身してボス達と一緒に試してみて分かつた事がある。

- ・変身できるのは人間の居ない真夜中だけ。
- ・一度変身するとしばらくは戻れない。
- ・変身中は人間と同じ身体構造になり味覚が変わり、人間が食べれる物だけ食べられる。  
・ウマ耳と尻尾は本物で偽物ではない。動かす事が出来て神経がちゃんと繋がつてい

る。

・朝、人間達が起きてくる時間になると自動的に変身解除される。

『まあ、大体こんなところだな』

三頭で恒例のお夜食会。ボスは干し草、コタロウはニンジン、私は休憩室に置いてあつたアンパンを食べている。ボス曰く、このパンと言う食べ物は人間の主食で馬は食べてはいけないものだそうだ。中身は餡子と言うとても甘くてベチャつとしたものが入っている。

『チョコの変身つて出来る事と出来ない事があるんだねえ〜』

ボスが説明してコタロウが呟く。この何日間で私はこの能力についてだいぶん把握出来たみたいで、そうなると心に余裕が生まれてくる。以前は変身後には元の姿へいつ戻れるのか不安だったが、今はそんな不安は無くなり、この姿になる事を楽しめるようになっていた。

『そう言えばボス、今日は食べる量が少ないけどどうしたの?』

私は疑問に思ったことを口にする。お夜食会の前にボスから今日は食べる量は少なめにと言われていたからだ。

『ああ、今日は外へ――、厩舎の外へ出てみよう。軽く深夜の運動と行こうじゃないか』

『えっ!? 外出るの!? 本当にっ!? やつたーー!!』

コタロウが嬉しそうに飛び跳ねてエサの容器を派手にひっくり返してゐる様子を私は驚きながら眺めていた。

ボスに教えられながらふたりに頭絡とハミを付けて行く。普段は馬具を付けられる側なのでこれもとても新鮮だ。

『一度説明しただけなのにこんなにすんなり覚えてくれるとは、本当に賢くて憶えが早いなチヨコは』

『チヨコが着けてくれると全然痛くないし苦しくないね!』

『ふたりともありがとう』

ボス達に褒められて頬が思わずにはけてしまう。引き綱持つたし、さあ行こう。…としてボスに綱を引っ張らってしまう。

『あわわっ!? ボス、どうしたの?』

『チヨコ、その姿で外へ出るのはマズイ。これを着なさい』

ボスはそう言うと壁に掛けてあつた服を咥えて私に差し出す。それはテキや国崎さんが私達のお世話を調教している時に着てゐる服と帽子だつた。

『この時間帯に馬が外に出てるのが見つかるだけでも十分問題になるが、それを曳いてお前の姿を見られるのが一番マズイ。廄舎の人間のジャケットを着て耳と尻尾を隠して普通の人間のように見せないと駄目だ』

『確かにチヨコの姿目立つよね』

『そうか、すっかり忘れていたが私は馬の耳と尻尾を持ち他のトレセンの人間が着てないような服を着ている。確かにこれはマズイ。私はボスに言われた通りに服を着て行く。』

『ううつ……何だか動きにくい……それに少し暑いよ』

『いつも着ているこの不思議なデザインの服の上から廄舎の作業服を着ると、とても厚みが出ると言うかゴワゴワするのが気になる。ズボンの中に入れた尻尾が足に絡みついて気持ち悪い。』

『今日は我慢するしかないな。何とか違う薄い服が着れたら良いのだが……』

『チヨコはその変な服脱げないんだよね』

『ううつ……』

以前、変身した後、ボスに『そのドレス衣装脱ぐことができないのか?』と聞かれたことがある。どうやつたら脱げるのだろうかと試行錯誤したのだけど、自分の服どころか普通の人間の服すら着たことが無かつた私は着る方法も脱ぐ方法もわからず、ボスに尋

ねても『人間の女の服は触つたことが無いから分からぬ』と言われ、やけくそでコタロウが服の裾を咥えて引っ張つたりしたが、余計に身体が締め付けられたりするだけで事態の解決には至らなかつた。

『まあ、そこは仕方がない。今は我慢だ』

ボスに言われて身体に違和感を感じつつも二人の綱を持ち歩く。廄舎のドアを開けて外へ出ると……。

『うわあ……綺麗だね』

『ああ、綺麗だな』

空には満天の星空が無数に浮かびキラキラとしている。大きく深呼吸すれば夏の夜の匂いに秋の良きの気配を感じる。その満天の星空の天井の下をボスと私とコタロウのさんにんで歩く。パカパカ、てくてく、パカパカ、二頭と一人の足音が静かな廄舎の表に響いていた。

『ねえ、お向かいの廄舎誰も居ないね』

『あ、本当だ』

コタロウに聞かれて私はようやく気付いた。外に出てから普段よりも静かな事に。よく見るとお向かいの廄舎が完全に真っ暗になつていた。近づいて窓越しに中を覗いてみると、見える範囲の馬房はすべて寝藁が無くなつていて、通路にはバケツなどが散

乱していた。

『向田厩舎なら先日解散したんだ。後の引き継ぐ人間も居なかつたらしい』

ボスがそんなことを教えてくれる。お向かいさん——向田厩舎さんはウチとは違つてウマが10頭以上いる大所帯でとても賑やかだつた。厩舎の窓から外へ顔を出してると私の事を牝馬と勘違いした向田厩舎さんの牡馬達によくラブコールや賑やかしを受けたこともあつた。それがまるで嘘のように静まり返つてゐる。

『ここにいた競走馬どこへ行つちやんただろうね』

疑問に思いボスの顔をふと見ると、ボスは何か辛そうな悲しそうな表情を浮かべていた。

『……ボス?』

『ああ、すまない。何でもないんだ。……そうだな、皆どこか別の厩舎で元気にやつてると思うぞ』

『……そつか。それなら良かつた』

私はそうやつて安堵する。

『ねえーボス。うちは大丈夫だよね?』

コタロウが聞いてくる。向田厩舎はうちよりも人数多くて皆強い馬ばかりだつたのに厩舎が無くなつてしまつた。なら…遙かに少なくて……はつきり言つて弱いうちは

どうなつてしまふのだろうか……少し不安になる。

『さあな。まあ、気にしてたつて仕方ない。決めるのは人間達だ。俺達に出来るのは頑張つて一つでも多くのレースを走つて優勝——、それが無理なら少しでも上の順位を獲つて賞金を稼がないといけない事だな』

『うへえ……結局そなるのぉ……。うーん……御手洗廐舎<sup>おとうわらしや</sup>が消えるのは嫌だけど……レースもあんまり走りたくないあ……』

コタロウがしんどそうに耳を伏せて私に頭を寄せて来る。そんなコタロウを撫でながら私は言う。

『大丈夫だよ。みんなで頑張れば絶対に大丈夫。御手洗廐舎<sup>おとうわらしや</sup>は無くなつたりしないよ。私ももつと頑張るからっ！』

やつと優勝てきて何かがつかめたかもしない、そんな感じがどこかする。この変身能力とその力の影響で人間の言葉と文字が読めるようになつたのもプラスになる。漠然とだけどそんな気がした。

『ううつ、チヨコは良い子だねえ、偉いよお～～』

コタロウが私に甘えて来る。コタロウの首筋を撫でてポンポン叩きながら『一緒に頑張ろう』と声をかけていく。

——ふつ、ふつ、ハアツ、ハアツ、……。

身体が熱い、息が上がる。汗がいっぱい出て髪の毛が顔に張り付く。あれ？おかしいなあ：何だか足もフラフラする。

『チヨコツ？大丈夫？チヨコの身体とても熱いよ？』

コタロウが心配してくる。

『人間は馬よりも歩幅が小さく走るスピードはもちろん歩くスピードも遅いからな。俺達がゆっくり歩いていても人間によつては結構ハードな運動になる。今日はこの辺で帰ろう』

ボスがそんなことを言つてくる。でもまだ厩舎の周りしか歩いてないよ？

『無理をするな。いくら変身に慣れていてもその身体ではまた本格的な運動をしてないだろう。馬と一緒に、最初からハードな運動はしない方が良い』

『ボス……コタロウ……ごめんね』

『良いよ！こうやって外出れただけでも嬉しかったよ！チヨコと一緒に歩けただけも十分楽しかったし！』

『続きはまた明日すればいい。今日は帰ろう』

『ふたりとも……ありがとう』

こうしてわたしたちは初めてのお外の深夜の散歩を楽しみ厩舎へ帰ることにした。

厩舎へ着いて、作業着と帽子を脱ぎ、ボス達の馬具を外して馬房に入れる。ボスを馬房に入れようとしたらボスが何かを咥えて私に寄せてきた。

『チヨコ、自分の馬房に戻つたらすぐこれを飲むんだ』

『ボスから渡されたのは”スポーツドリンク”と言われる薄白い液体のジュースだ。ボスありがとう。でもこれすごく甘しょっぱくて飲みにくかつたから、今はたぶん飲めないよ』

以前、冷蔵庫に入つてるジュースでこれを見つけて飲んだ時、甘さと塩辛さ——しょっぱさの二つを同時に感じて、しかも飲みにくくて目を白黒させた事があった。それ以来”スポーツドリンク”は無意識で避けていた。

『いや、大丈夫だ。むしろこういう場面で飲むように作られている。人間の作つた人間用の不思議な飲み物だ』

大丈夫だから、そうボスに念を押されて受け取り、ボスを馬房に入れ門を閉じた後、自分馬房に戻る。容器の蓋を開け、恐る恐る飲んでみると——、

『えつ!?ええつ!?何これ……凄く飲みやすくて…少し甘くて美味しい……!?!』  
びっくりした。口に入れた瞬間、スゥーッと体の中に沁み込んでいく感覚。あののど

に引っ掛かる強い甘しよっぱい感覚は無くて程よく甘いし、よくよく後味を感じると微かに塩味を感じるがこれがまた違和感なくとてもちようど良い具合だ。

——クピツ、クピツ、クピツ、コクンツ、コクンツ。

私の喉が動いて自分でも信じられないくらいのペースで飲んで行く。なのに喉にも引っ掛けからずにお腹に溜まる感じも無い、まるで口の中で沁み込んで消えて行つてたようだ。気が付けば容器は空になつていた。

『ボ、ボス……これ、このスポーツドリンクつてすごい!!』

『そうだろう？俺も最近知つて驚いた。便利な物が出来たんだな。俺達みたいに岩塩と水を交互に舐めたり飲んだりするよりも早く解消できる』

そうなんだ。夏場暑い時期、ヘロヘロになつたら馬房に国崎さんが岩塩を置いてくれてそれをちびちび舐めてお水を飲んだりしていたけど、人間はその代わりにこんなものを飲むんだ。

『それは人間用に作られていて、馬の俺達じゃ恐らく飲めないか、飲んでもあまり効果はないいらしい。人間専用の飲み物なんだ。チョコ、今のお前には水と岩塩よりもこのスポーツドリンクを飲んだ方が効果があると思う。馬の時は水と岩塩の方が良いと思うが』

ボスはそう言って私に教えてくれる。全然知らなかつた……。ボスはやつぱりすご

いや！

『ああ、そうそう。念の為、お前の馬房の入り口にもう一本予備のスポーツドリンクを一  
丨、お前早いな』

ボスが言い終わる前に私の身体は動いていた。馬房の入り口、門の下から顔を出せ  
ば、私の馬房の前にはもう一本スポーツドリンクの容器が置いてあつた。すぐ手に取り  
蓋を開けると一気に流し込む

——んつぐつ、んつぐつ、ゴクツ、ゴクツ、ゴキユツ、ゴキユツ……。

『チヨコ、凄い飲みっぷりだね』

『ああ、そうだな……』

ボスとコタロウの呆れた声が聞こえてくるがお構いなしに飲み続ける。どんどん体  
に吸い込まれて行くスポーツドリンク。胃に入つてゐるはずなのに、まるで喉から身体全  
体へ染み渡り直接広がつてような心地よい感覚――。

やがて二本目の飲み切るころ、身体に沁み込んでいたスポーツドリンクが喉を通り胃  
に溜まり始めてる感覚が出てきていた。飲み終えるといつの間にか身体の熱さも上  
がつていた息も髪の毛が張り付くほどの汗も引いていた。

『ふはあ……ボス美味しかったよ！お陰で身体の熱さも取れたよつ！』

『そうか、それは良かった。次からは予め準備しておこう』

うん、そうだね！……と私は言おうとして言えなかつた。どつと一気に疲れと眠気が押し寄せてきたからである。

『ごめん、ボス……コタロウ……私……もう眠い』

『わかつた。今日は散策付き合つてくれてありがとう。もうそのまま寝なさい、朝には変身も自然に解除されているだろうし。』

『チヨコ！おやすみ！今日は楽しかつたよ』

『うん……ふたりとも……おやすみ』

私はそう言うと人の身体のまま馬房の寝藁の上に寝そべる。寝藁のくすぐつたさを感じながらゆっくりと静かに睡魔に身を委ねて行つたのであつた。

## chapter. 4 「トレセン散策」

——美浦トレセン御手洗厩舎 22:00

目を閉じて祈る。光の粒子に包まれた馬体が変わっていく。両脚は両腕と両足に、馬体は身体に。四本脚から二足歩行へ、立ち上がりながら目を開ける。

『変身完了!』

身体を纏つていた粒子の残りが完全に消えるのを確認して高らかに宣言する。もうすっかりこの儀式には慣れ、自分のモノにできたと思う。

『うーん……やはり大体7~8秒は掛かってるな』

『ええっ!? そ、そんなあ……』

隣の馬房から聞こえるボスの声に私は力なくへたり込んでしまう。人間が使っている”トケイ”と言う時間を見る道具をボスの馬房の前に置いてもらつていて私が変身し終わるまでの時間を毎回計つてもらつている。

この変身能力をより完璧に自分のモノにするため変身時間短縮を狙つてているのだ。目標は時間掛からず一瞬で変身できるようになる事。そうすればもしもの時に行く

変身したり逆に変身解除できるようになり、変身中の無防備状態を回避できるからだ。

しかし、ここ数日間はどんなに頑張つても5秒の壁を超える事が出来ずに入る。頑張つても7～8秒は必ずかかる感じだ。

『チョコ、あまり無理するな。これ以上の時間短縮は望めないし、危険だ』

『ううつ……でも……』

『良いか、馬が人間になると言うのは本来ではありえないことなんだ。動物の身体が人間の身体になる、身体の小さな細胞レベルで変化、いや作り変えられているんだ。むしろたつた7～8秒で何も危険を冒す事無く変身できること自体奇跡に近いんだ。これ以上無理すれば命の危険すら危ぶまれる』

ボスにちょっと怖い事を言われてしまう。確かに変身時に焦つていると何か違和感や不安感を感じ、身体の中で溢れる力が暴れる痛みのような感覚がある。もしも、変身中に事故が起きたら……そう思うと体が震えてしまう。

『わかったよボス。変身時間の無理な短縮はもうやらないよ』

『ああ、その方が良い』

『そうだよ！今でも十分速いからね！チョコの部屋がピカーッて光つたら次の瞬間には人間の女の子が出てくるんだから！』

コタロウにもそう言われて私は納得する事にした。

すっかりお馴染みになつた光景、毎日の日課。

私が変身してボスとコタロウを馬房から連れ出し厩舎の外を歩く。以前やつていた深夜のお夜食タイムは今はほとんどしてない。ボス曰く、馬は食後に運動はしない方が良いそうなので。コタロウもお夜食タイムよりは外で歩く方が楽しいと言つていた。

ただ、人間体に変身してる時の私はお出かけ前に少し食べている。人間は空腹で運動するのは身体に悪いらしくて少しだけ水分と食べ物をとる方が良いそうだ。休憩室の冷蔵庫や戸棚にあるお菓子を食べてお水を飲んで、準備をする。

厩舎の作業服を着て、帽子を被り、ボス達に馬具を着けていく。

『チヨコ、今日は鞍を着けてくれないか?』  
『えつ? 鞍?』

ボスからそんな提案を受けた。

『鞍つて私達に人間が乗る為に着けるものだよね?』

『ああ、そうだ。チヨコ、きょうは俺の上に乗つてみないか? 折角人間の身体になつてるんだ。馬に騎乗する経験をするのも悪くはないぞ』

確かに、馬に乗ると言うのは人間の姿の時にしか出来ない事だ。

『良いの？ 私、鞍装着したことないよ』

『チヨコなら大丈夫だ。俺が教えるから。』

『うん、じゃあ鞍を着けてみるね』

ボスに教えてもらつた通りに鞍を着けていく。お腹に回して締め付ける帶を着けている時に力加減が難しくて、少し緩めに着けようとしたらボスに『もつと強く締めるんだ。これではチヨコが落ちてしまう』と言われてしまいおつかなびつくりしつつ強めに締めた。

締める時にボスの馬体がビクンッとなつて少し驚いてしまつたけど『気にするな大丈夫だ』と言つてくれた。

ボスに教えてもらいながらなんとか鞍を着け終わる事が出来た。頭絡を合わせると私達が普段着ける馬具全部付けた事になる。

『……ボス、出来たよ。どうだつたかな？』

『チヨコ……、お前、人間だつたら厩務員の才能があるな。一度しか教えて無いのに馬具装着上手いし問題が無かつた。初めてでここまで上手い奴は見た事ない』

『えっ！……ほ、ほんとう？……えへへつ、嬉しいな』

ボスに褒めても貰つて私は舞い上がつてしまつた。それにしても馬具を着けるなん

て今までしたこと無かつたのにどうしてこんなにすんなり出来たのだろうか？付けている最中、何か以前にもこんな事をしたような記憶があるのだけど、あれはいつ、どこで、誰と誰に――。

上手く思い出せない。ボスの教え方が上手いのと普段馬の時に国崎さんやテキに着けて貰っている時に神経を研ぎ澄ませて集中していたのでそれで憶えてたのだろうか？

ふと、視線を感じたので振り返るとコタロウがこちらを見つめていた。

『……？　どうしたのコタロウ？』

『……あ、あのね、チヨコ……。お、俺にも……鞍、着けて……欲しいな……』

珍しく歯切れ悪い口調で恐る恐る聞いてくるコタロウ。私はコタロウが自分から馬具を着けて欲しいと言つてきたのに驚いた。

コタロウは昔から馬具を着けられるのが大嫌いで、育成牧場に居た頃は馬具を着けようとするたびに暴れててスタッフさんがたいそう手を焼いていたのを覚えている。

私が横について「大丈夫、怖くないよ、怖くないよ」と寄り添い話しかけながら何とか着けて貰える感じだった。

競走馬デビューして御手洗厩舎に来てからも馬具を嫌がる癖は少しあつて良く国崎さんを困らせていたつけ。

そんな馬具、嫌いで特に鞍を載せられるのが何よりも嫌いだつたコタロウが――。

『良いの？ コタロウ鞍着けられるの嫌だよね？』

『うん……でもチヨコが着けてくれるなら多分大丈夫。ねえ、お願ひ。俺にも鞍着けてくれよつ、頼むよ……チヨコ。……ボスばかりするいよ』

コタロウがそう訴えて来る。最後は顔を下に向けて語尾が尻すぼみになつて上手く聞き取れなかつたけど、コタロウなりに精一杯の頼み事なんだと感じた。

『ボス……どうしようか？』

『……本人がそう望むなら着けてやれ。――コタロウ、お前が自分からつけて欲しいと頼んだんだ、嫌がつたり暴れたりするなよ。…………もしも暴れてチヨコに怪我させてみろ。ただじや済まらないからな、覚悟しておけよ』

『ううつ、わ、わかってるよう……』

ボスがコタロウに近づいて何か耳打ちする。コタロウはビクツと身体を小さく震わせながら答える。何だろう、ちよつと緊張感が出てきた気がする。

『……という事だ。チヨコ、コタロウの方もよろしく頼む』

『う、うん……』

ふたりの間に流れる張りつめた空気に押されながらもコタロウの方にも鞍を着けていく。一つ一つ装着動作をするたびに必死に何かに耐えているコタロウの身体がビ

クツビクツと震えて心配してしまつたけど、何とか装着できた。

『……出来たよ。コタロウ……どうかな??』

『うん……チヨコが着けてくれるなら嫌じやないよ。バスの言う通り上手いよ』

『よかつた……』

ほつ、と安堵のため息が出た。

『準備は出来たか、出発するぞ』

バスが声をかけて来たので私達は廄舎を出る事にした。

廄舎の周りをバスとコタロウを曳いて歩く。いつもの足音に鞍の揺れる音が加わつてほんの少しだけど賑やかな感じになつていて。

『そろそろ良いか。さあチヨコ、俺に乗つてみるんだ』

バスが立ち止まりそう言つてくる。改めてバスの方を見るとその大きさに憚いてしまう。鞍が私の頭の上近くにある。

『チヨコ、まずは鎧を引っ張つておろして左足を載せるんだ。そして左手で手綱と俺の蠶を掴め』

『ええっ!? ボスの蠶を掴むの!? 良いの……?』

『ああ、大丈夫だ。ただ、全体重は掛けないでくれ、さすがに千切れで痛いからな』

『う、うん……』

左手で手綱とボスの鬱を掴むとボスの身体から熱さと鼓動が感じられてドキドキする。左足を精一杯上げて鐙に掛ける……ううつ、後ろに転びそう……。

『チヨコ大丈夫?俺が支えてあげるね!』

『あ、ありがとう、コタロウ』

後ろからコタロウが私の背中とお尻を頭で支えてくれる。何とかひつくり返らずにすみそうだ。

『右手で鞍の前方部分を掴め。そして右足を一気に蹴り上げて上るんだ。コタロウ! チヨコにタイミング合わせて持ち上げて支えてやれ』

『わかつたよう!!』

私を支えるコタロウの頭と首に力が入るのが分かる。

『チヨコ、上るときには合図をくれ。コタロウが支えてくる』

『うん!——じゃあ!ボス、コタロウ!!行くよ!!!セイツ!!』

『良いよ!——、そおれっ!!』

右足を思いつきり蹴つてジャンプする。それに合わせてコタロウが私を持ち上げてくれる。身体が、視線が、一気にボスの背の上に乗る。

『よし、無事乗れたな!』

『やつたー!! 大成功だーー!!』

ボスとコタロウの声が下から聞こえてくる。前を向けば……見た事のない高くて広い視界が広がる——、これが——、鞍上——。

『すごい……すごい……、凄いよボス……』

『どうだ、乗つてみて良かつただろう』

『うん、こんな世界があつたなんて……』

『これが私達の上に乗つっている人間が見れる景色——。』

『では、動くとしよう。チヨコ、右足も鎧に掛けて手綱を両手でしつかり握るんだ』

『う、うん。』

言われた通りに右足を轡に掛けて左手に持つていた手綱を両手に持ち替える。姿勢が真っ直ぐ向いたところで、ボスがゆっくりと歩き始めてくれる。ボスの後ろ頭が動き、耳と鬚がなびくのが見える。カツポ、カツポ、と蹄の音がいつもよりも遠く聞こえ高く広い景色がゆっくりと流れていく。それにしても——。

『結構、揺れるんだね。わっ、わわわ……』

ボスの身体がゆつたりと波打つように揺れ、身体が前後にゆつくりと揺さぶられる。慎重にゆつくりと歩いてるのにこんなに揺れるなんて知らなかつた。これで普通に歩いたら、それこそレースの時みたいに走つたら一体どれほど揺れるんだろうか——、想

像しただけで震えてしまう。

『怖くて緊張してるのは? チョコ?』

少し視線を下げるボスが私の方へ視線を向けていた。

『えつ、わ、わかるの?』

『ああ、分かるさ。チョコの気持ち、鼓動が手綱と鞍を通じて伝わって来るんだ』  
ボスがそんなことを言つてくる。確かに良く意識してみれば私も感じる事が出来る。  
両手に握った手綱から、跨った鞍から、両足の間にあるボスの横腹から、ボスの感情、気持ちが伝わってくる——、そんな気がした。

『馬の——、俺の動きに合わせてお前も身体を動かすんだ。大丈夫、お前ならできる。馬のお前なら、馬の感性を持つ今のお前ならできる』

ボスがそう言つてくる。ボスの声が前方にあるボスの頭、正確には口の部分からではなく、足元から——、熱と鼓動を介して伝わってくる。

私は深呼吸して意識を集中させる。馬の時の自分の動き、身体の動かし方を思い浮かべそれをボスの動きに合わせ自分の身体を動かす。

『いい……いいぞチョコ、上手く合わされてる。これなら速歩や駆足も行けるぞ』

ボスが少し興奮気味に伝えて来る。私も何だか乗っていて楽しい……。

『ねえ、ボス。ちょっと遠出してみてもいい?』

『ああ、構わないぞ！』

ボスとコタロウと深夜のトレセンを散策する。ヒトもウマも居ない静かな夜空の下にふたりの蹄の音が聞こえる。

ゆらり、ゆらり、と揺れるボスの背中が心地よくて、上を見上げれば星空が広がる。私はそんな夜空に手を伸ばす。今なら星を手で掴めそうだ。

『……うん？』

『ボス、どうしたの？』

ボスが立ち止まつたので私は尋ねる。

『チヨコ、少し寄り道して良いか。会いたい奴が居るんだ』

『えつ？……うん、良いけど』

ボスが向きを変えて、ある厩舎の一角へ入つていく。ここはどこだろう？

私達が入つて来たのにその厩舎の馬達が気づき、ざわつき始める。

『なんだなんだ…？』

『なんだこいつら……』

『何でヨソ者がこの時間に来てるんだ……？』

そんな声と警戒する視線が四方から突き刺さる。

『ボ、ボス……ちょっと、これまずいよお～』

隣のコタロウが不安そうにボスに寄つて来る。

『ああ、すまない。すぐ終わらせるから……』

『オジユウ、オジユウ、起きてるか？俺だ、ブルドックヘッドだ』

ボスが呼びかけると、中からひとりの鹿毛色の額から鼻先にかけて一筋の流星を持つ馬が顔を出してきた。

『何だ？ 何か用か？……お前こんな時間に外出歩いて良いのか？』

とても鋭く厳しい視線を持つその馬は私に気づいたのかこちらに顔を向ける。

その瞬間、とてつもない重圧と威圧感を私は全身で受ける。この馬、只者じやない！

かなり強い私達の上位の存在だ！！

『何だあテメエ？…………おいブル、お前んとこのニンゲンは夜中に馬を連れ出すバカ者なのか？』

『まあそんなにイラつかなつて。——チヨコ、こいつはオジユウチヨウサン、俺の同期で古い友人だ。彼に帽子を取つて挨拶しなさい』

『うん……えっと、初めまして、オジユウチヨウサンさん。私はチヨコエクレールと言います。ボス……ブルドックヘッド先輩と同じ厩舎に所属する三歳馬です。以後お見

知りおきください』

『なつ……!?』

帽子を取つて頭を下げる挨拶をする。相手が息を?み動搖するのが感じられた。

『オジユウ、驚いただろう?』

『ブル、何だこいつは?ニンゲンのくせに何故俺達と喋れるんだ?……いや、ニンゲンな

のにヒトの匂いがしねえし、俺らと似た耳を生やしてるし……何者なんだテメエはよお

……』

『ひいいつ……』

再び強烈な重圧と威圧感を受けて私は身を縮こめる。

『おいおい、だから威圧するなつて。こいつはチヨコエクレール。俺の厩舎の新入りで  
正真正銘の競走馬、俺達と同族だ。訳あって真夜中の間だけ人間に変身できるんだ。』

『ほう……で、そのニンゲンに変身とやらをするお気に入りを俺に見せびらかしに来た  
のか?』

『違うつて……。今日初めて厩舎の敷地外に出てな、たまたまここを通りかかっただけ  
だ。確かお前が帰つて来るとテキが話してたのを思い出して顔を見に来ただけだ。  
あとは、コイツ——チヨコエクレールは昼間は普通に馬の姿をしてる、もし調教馬場で  
会う事があつたら仲良くしてやつて欲しいんだ』

『ふん、手土産も何もなくか』

『それは悪かつたつて、今度また改めて来るからその時な。で、足の方はもう良いのか』

『ああ、まあ何とかな。ニンゲンどもはまたレースに出させるつもりらしい』

『うるさい、お前こそいい加減早く障害レースへ転向しろよ』

『またその話か。何度も言つただろう、俺に障害レースはとてもじやないが無理だ。勝てないし完走すら危うい。せいぜい最後尾で障害超えられずに転倒して予後不良するのがオチだ。お前とのマッチレースなんて夢のまた夢だ』

『嘘つかな！お前はまだ本気を出してない！本当のお前なら……きつと——』

「何だ!? 何かいるのか？ 誰だ！ そこに居るのは!?!」

厩舎に明かりが一斉に灯る。オジユウチョウサンさんの厩舎の人を見つかってしまったんだ！

『マズイ、コタロウ！ 逃げるぞ!! チョコ！ しつかり捕まつてろ!! オジユウまたな!! 次会うまでにくたばるなよつ!!』

『ま、まて！ ブルッ!!』

オジユウチョウサンさんが何か言いたそうにしていたが小型ライトを持った人間達が厩舎から続々と出てきたので私達はその前に厩舎の敷地から一日散に駆け出して

行つた。

『フーッ…フーッ…』

『ぜえ……ぜえ……ぜえ……』

『ハアツ……ハアツ……ハアツ……』

何とか御手洗廐舎まで戻つて来れた私達は息も絶え絶えになつていた。あの後、人間達が「放馬！放馬！」と騒いで、私達はトレセン内を駆け回りながら必死に包囲網を潜り抜けてここまでたどり着いたのである。

道中、落ちない様に必死に手綱と鞍にしがみ付いてボスの走りについて來ていた。カーブでは曲がり切れないコタロウを受け止めるためにボスが外側に回りコタロウのタックルを受けながら何とか曲がる事が出来ていた。

『ボス……コタロウ……大丈夫？』

私とふたりの息が落ち着いたところで、ふたりに聞いてみる。

『ああ、俺は大丈夫だ。ふたりともすまんかつたな』

『俺こそごめん。曲がり切れなくてボスに何回もぶつかっちゃつた。チヨコもごめんね』

『気にしないで。私は大丈夫だよ』

『良かつた……』

私は一人を曳いてそれぞれの馬房に入れる。水桶を用意してふたりに飲んでもらしながら馬具を外していく。

『なあ、チヨコ。お前、モンキー乗りなんていつ憶えたんだ?』

『えつ? モンキー乗り……?』

二人の馬具を外して私が脱いだ作業服と帽子と一緒に片づけた後、コタロウとボスの身体をタオルで拭いてるとボスがそんな事を聞いてきた。

『騎手がレースで俺達に乗つてる時にする姿勢だ。鐙の上に立つて腰を浮かして背を丸めて膝でバランスを取りながら前傾姿勢で騎乗するスタイルだ。俺が駈足に入つたら、チヨコ、お前は自然とその姿勢に移行したんだぞ』

ボスがそんな事を言ってくるが私には全く記憶がない。ひたすら手綱を握りボスの首筋、なびく鬚を見つめながら必死に落ちない様に耐えていただけだと思つたけど。

『へえーあれってモンキー乗りって言うんだ。俺斜め後ろから見てたけど、チヨコカツコよかつたよ!まるで人間のホンモノの騎手みたいだつたよ!!』

コタロウがそう言つてくる。ふたりがそう言うならきっとそうなのだろう。でもどうしてそんなことできるようになつたのだろうか。全く心当たりがない。

『モンキー乗りはそう簡単には出来ない。素人が見様見真似でしても形ばかりで実際走ればすぐにボロが出る。しかし、チヨコ、お前の騎乗はかなりレベルが高いものだつた。重心取り、荷重移動、まるで慣れたプロに近い物だつた』

ボスが真剣に私を褒めている。でも少し怖い気がするのは何故だろう。

『本当に何も覚えてないのか?チヨコ、お前は何者なんだ?』

ボスの鋭い目線が私を貫く。私を――、私の心の奥を斬り開くように――。

『わ、私は――、』

何か答えなきや……そう焦る私の身体が光を帯び纏い始める。時間が来たみたいだ。

『時間か。チヨコ、よく考えてみてくれ。お前の秘密の何かヒントになるかもしけん』  
『う、うん。わかつたよボス』

私の身体を纏う光が一層強くなつたので私も自分の馬房に入る。開けていた門を閉めて寝藁の上に座り、両手を――もうすぐ両前脚になるモノを自分の身体の前、寝藁の上について俯いたような姿勢を取る。この姿勢だとその体勢のまま馬の姿に戻れて樂

だからだ。

『私は誰？』

視界が眩い光に包まれる瞬間、ふと心の中で呟く。

# chapter. 5 「Beer! Beer! Beer!

！」

——美浦トレセン 御手洗廄舎 22:00過ぎ

『チヨ、チヨコ!?』

『きやあつ!?……ボス? どうしたの?』

『うわっ!?……びっくりしたなー。ボスいきなり大きな声出さないでよおー』

『……す、すまない』

今日も私は変身してボス達と廄舎の外へ出かける事になり、出発前に私が少し食べておかないといけないという事で休憩室にお邪魔していた。

戸棚の中にあつたのは『柿の種』と言うピリッとした辛い小さくて細い煎餅みたいなものとピーナッツと言う豆が入っているお菓子だ。

次に飲み物を取ろうとして冷蔵庫を開けると何やら見慣れない缶容器がたくさん入っていて、これは何と言うジユースなのだろうか? とボスに聞こうとしたら前述のような反応が返ってきたのであった。

『ボ、ボス……これは…』

『ビ、ビール!? ビール!! ビールじゃないかあああああ!!!』

ボスが興奮して雄叫びを上げる。確かに缶には”麒麟堂プレミアムモルトビール”と書かれていた。金色のなんだか高級そうなデザインをしている。

『ボ、ボス……、このジュースがビールって言うの?』

『ジュースじゃない!! 酒だ! お・さ・け!!! あああああ、こうしてまたビールと再会できるとはおもわなかつたぞおおお!!!』

『きやつ?……ごめんなさいボス』

『ボスどうしたんだよお!』

ボスのあまりの剣幕に押されてしまう。横ではコタロウがオロオロしていた。

『チョコ!! 賴む!! ビールをつ!! ビールを俺に飲ませてくれえええ!!!!』

『ボスッ! ちょっと落ち着きなよつ!! チョコが困つてんだろうつ!!!』

ボスが嘶きながら両前脚で激しく前掻きをしてる。コタロウが必死に抑えようとしているけど小柄のコタロウが大柄のボスに敵うわけなく振り回されていた。

『ボ、ボス: 落ち着いて……。このビール、ボスにあげるから』

『ああああ、チョコ! 早く! 早く飲ませてくれえええ!!!』

ビールの缶をブルルツ、ブルルツと大きな鼻息が聞こえているボスの眼前まで持つて

いく。蓋を開けるとカシユツ！と 小気味の良い音がして中から泡が出てきた。

『わつ！はわわ…！ボス、中身が泡がいっぱい出てきたよ！と、止まらないよお！？』  
『チヨ、チヨコ!!そのまま俺の口に入れろっ！！早くっ！！』

『う、うん。わかつたよボスっ』

私は泡が溢れ始めた缶をボスの口へと突っ込む。するとボスは凄い勢いで飲み始めた。ゴキユツゴギュツとボスの喉が鳴る音が深夜の休憩室に大きく響いていた。

『うめえ！うめえよおおおおおお…！ああ！ビールッ…！久しぶりのビールッ…！もう二度と飲めないと諦めていたが…！またこうして飲める日が来るとは思わなかつたぞおおおお…！』

!!!

目から大粒の涙を流し歓喜の咆哮を上げながらビールを飲んで行くボス。なんだかボスがいつもよりも幼く見えてしまう。やがてあつという間に飲み干してしまったボスは缶を放り投げると私に迫ってきた。

『チヨコ！まだつ、まだあるんだろうビール…！頼む、飲ませてくれっ…！』

『う、うん、良いよ…！』

ボスに催促されて冷蔵にあるビールの缶を次々と開けてはボスの口に入していく。ボスがあつという間に飲み干して次を催促し私が慌てて次の缶を開ける。そんな忙しい動作がしばらく続いていた。

『うめえ！うめえ！！ビールうめえ！！！ビールだけでも美味しいのに、人間の女にお酌までして貰えるなんて!!!前世ぶりだつ！！——ああっ、チヨコ!!酌するの上手いな!!!もつと！もつとだ！もつとくれえええ!!!!』

『ボ、ボス……起きて……起きてよお』

『ボス！こんなところで寝るなよお』

厩舎の通路に倒れて大きなびきを搔く大柄の馬——ボスを私とコタロウが一生懸命に引っ張ろうとしていた。

あのあと、冷蔵庫の中のビールをすべて飲み干したボスは冷蔵庫の横に置いてあつた段ボールと言う茶色の箱に入っていたビールを目ざとく見つけそれも全部飲み干してしまった。

大量の空き缶に埋もれるように横倒しになつたボス。何とか馬房まで連れて帰りた

いけど小柄のコタロウと人間体の私では酔い潰れたボスの馬体はビクともしなかつた。

『はあつ、はあつ、……どうしよう』

『……もう放つておこうよ』

『コタロウ……？』

『いいじやん。俺達の事ほつ散らかしてさ、自分だけ散々楽しんでそのあとバタンつて倒れて寝てるんだもん。もうこのまま放つておこうよ』

コタロウがそうぶつきらぼうに咳く。

『でも……』

『俺はチヨコと毎晩出かけるのを楽しみにしてるんだ。チヨコだつて折角変身してくれたのにこのままで良いの？』

『うーん……でも』

『ボスなら大丈夫だよ。きっと人間達が起きてくるまでに起きるつて』  
『そうかな……？』

『大丈夫だつて！…それよりも早く馬具着けて出かけようよ！時間なくなるよ？』

『う、うん……』

なんだかいつもより剣？なコタロウの雰囲気に押されてしまい、私は出かける準備に入ることになった。

『チヨコ……鞍着けないの？』

私が作業服を着てコタロウに頭絡を着けて出発しようとしたらコタロウが話しかけてきた。

『コタロウ、鞍着けるの嫌じやないの？』

『昨日着けてたじやん。今日は着けてくれないの？』

『昨日はボスが着けてて、コタロウもそれを真似して着けてただけじやないの？』  
『俺、チヨコに鞍着けて欲しい。それでチヨコに乗つて欲しいだ』

コタロウがそんな事を言つてくるので私は驚いた。コタロウは馬具もそうだけど人を乗せるのも凄く嫌がつて育成牧場では何人ものスタッフさんを振り落としていた。競走馬デビューしてからも何人もの騎手さんがコタロウに乘ろうとして振り落とされたり、そもそも鞍に跨らせてもらえないかつたりで大変苦労したとテキ達がぼやいていたとボスが言つていた。

そのせいかコタロウの背に乗ると言う選択肢すら思い浮かばなかつたのだ。

『良いの……？コタロウ、人に乗られるの嫌じやないの？』

『チヨコなら良いよ。ううん、チヨコに乗つて欲しい。お願ひだチヨコ、俺に乗つてく

れ

とても真剣な目で見つめて来るコタロウ。初めて見るそんな彼の強い瞳にドキッとしてしまう。

『ねえ……頼むよ。俺に乗ってくれよチョコ。…………それとも嫌?俺なんか乗りたくない? 大きくてカツコいいボスの背の方が良いの?』

寂しそうに眼を逸らしてしょげるコタロウに私は慌てて首を横に振る。

『ううん!! そんな事ないよ!! ボスが良くてコタロウが駄目なんてないよ!!』

『じゃあ鞍着けて乗つてよ』

私はコタロウに鞍を着けて乗ることになった。

厩舎前で引き運動してウォーミングアップをしてコタロウの横に立つ。

ボスよりは低いけどコタロウの背も改めてみると大きくて高い。

『チョコ、これ使いなよ。これに乗れば一人で乗れるよ』

コタロウが厩舎の外に置いてあつた踏み台を咥えて持つてきただのでそれに乗る。すると足をそれほど高く上げなくとも鐙に足を掛ける事が出来た。

左手で手綱とコタロウの鬣を握るとコタロウの馬体がビクッと少し跳ねた。

『コ、コタロウ……大丈夫?』

『ごめん……俺は大丈夫だから続けて。……チヨコが乗るんだ、落ち着け俺。乗るのはチヨコだ、落ち着け俺……』

『う、うん……』

コタロウが何かブツブツ呟きながらジツと耐えてくれてるので私は素早く乗ることにした。

『う、うわっ!?』

『きやつ!……コタロウごめん。驚かせた?』

私が乗った瞬間、コタロウの背が一瞬飛び跳ねて馬体がよろけてしまう。なんとかバランスを取つて踏ん張り転倒や落馬はしないよう耐える事が出来た。

『だ、大丈夫!……俺こそごめん。チヨコ、怪我とかしなかつた?』

『私は大丈夫だよ』

『ありがとう……。じゃあ歩くよ』

そう言うとコタロウが歩き出した。

深夜のトレセンをコタロウに乗つて歩く。ボスと違つてコタロウから見る視界は少し低いけど、それでも人間や馬の視線よりは高く見晴らしも良い。

コタロウはボスよりも馬体が小さくて細いからか足でしつかりと胴体を挟み込む事が出来て安定感があります。コタロウは『チヨコ、くすぐったいよお』と照れ笑いしていた。ボスよりも揺れが大きいけど軽快で少し早いペースで進んでいくコタロウ。馬によつて歩く癖とか結構違うんだなあと私は感じながら揺られていた。

『チヨコ、俺行つてみたところがあるんだ。そこへ行つてもいい?』

『良いよ。コタロウもお友達にでも会いに行くの?』

『違うよ~』

そんなやり取りをしながら向かつた先はトレセンの調教馬場だつた。

『ここなの?』

『うん、そうだよ。俺チヨコに乗つてもらつてここを走つてみたいんだ。チヨコとならきつと楽しく走れるよ』

『でも、門が閉まつてるよ?』

『ううつ……』

コタロウから降りて入口の門を確認してみる。入口の門は閉められてて鍵もしつか

りかかっていた。

『うーん……やっぱり鍵がかかってて開かないよ。どうするコタロウ?』

『ねえチヨコ。今は人間の姿なんだからどうにかして開けられないの?』

『さすがに、鍵が無いと無理だよ……』

『そ、そんなあ……』

コタロウが悲しそうにしょげてしまつている。廄舎から結構な距離を歩いて来たんだ。このまま帰るのもかわいそうな気がする。

——どうにか鍵が開かないかな、開けて欲しいな……

『チヨ、チヨコ!?』

『えつ!?えええつ!?』

私の身体が淡く光る。一瞬、このタイミングで変身解除するの?と思つたけど何かが違う。そして——。

——ガチャンツ!!

私の身体を纏う光が消えたと思うと、大きな音と共に門の鍵が外れて私の手のひらに落ちる。そして目の前で重たい金属音を響かせながら門がゆっくりと独りでに開いて行つた。

『えつ……門が開いた!?』

『やつたーっ!!!さすがチョコだ!!!ほら早く行こうよっ!!』

『ま、まつて、コタロウ……!!』

今にも駆けだしそうになるコタロウに慌てて跨つて私達は調教馬場へ繋がる地下道へ降りて行つた。

私達が地下馬道に入るとまるで導かれるように進む方向に勝手に明かりが灯つていく。煌々と明かりが灯る誰も居ない静かな地下馬道をコタロウと歩いて行く。

『チョコー！ここが一番近いし、ここへ行こうよ！』

地下馬道へ潜つて最初に現れた地上へ上がる坂道を見つけて興奮気味にコタロウが言う。地下馬道はまだ先の方まで明かりが灯つてゐるけど……。

『良いから！時間ないし早く走ろうよっ!!』

『うわっ!?まつ、まつてコタロウッ……』

コタロウに引っ張られるように私達は”Dコース 2000m”と書かれた出入り

口へと上つて行つた。

『うわーつ、広ーいっ!!』

誰も居ない静かな深夜の馬場が目の前に広がつていた。月明かりと空に浮かぶ沢山の星々のきらめきがうつすらとダートコースを照らしている。

『俺！もう我慢できない！行くよチヨコ!!』

『ちよつ、ちよつと待つてコタロウ……きやあああつ』

『うおおおおおおおおおおーーーー!!』

馬場に入るとコタロウが急発進して駆け出していく。怖ろしい勢いでどんどんスピードを上げていく。ボスや私の走りとは全然違うッ！！

コタロウの動き、コタロウの呼吸に合わせようとしてもうまく合わせる事が出来なくて身体が悲鳴を上げそうになる。

『くううつ…!!』

コタロウとは走るレースの種類が違うみたいでデビュー以来一緒に走る事は無かつたから知らなかつたけどこんな凄い加速するなんてっ！！

小さな身体から暴力的な加速を生み出し、身体が暴れるようにくねり何度も振り落とされそうになりながら必死にしがみ付く!!

『すごいっ!! すごいよチョコ!! チョコが乗ると全然重たくない!! それだけじゃない!! 力がつ!! 力が湧いてくるよ!! あはははっ!! どこまでも走つていけそうだよ!!』  
興奮気味に叫ぶコタロウ。私はそれに答える事が出来ずにただただしがみ付く事しかできなくていた。

『フーッ!! つ、疲れたあー!!』

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……」

調教馬場を一周してバテてしまい、コタロウとダートコースの上に寝転がつて空を見上げる。心地よい秋風混じりの風が頬を撫でる。目の前いつぱいに空に浮かぶ星の海がきれいだ。

『チヨコ、ありがとう。俺とても楽しかったよ!!』

『ハアツ……ハアツ……ハアツ……それは良かったよ。コタロウごめんね、うまく乗れなくて……』

『ううん、そんな事ないよ!! チヨコが乗つてくれたおかげで、俺初めてこのコース一周できたんだ!!』

『ハアツ……ハアツ……そ、 そうなの?』

『うん！ いつもはここよりも小さい所を走つてゐるんだ。でも今日はチヨコのおかげでいっぱい走れたよ!! 力も沸いて足も全然痛くならないし、チヨコの力すごいよッ!!』

コタロウがそうやつて褒めてくれる。私はコタロウに必死にしがみ付いてただけで何もしてない気がするけど、コタロウの力に慣れていたなら嬉しい。

『ありがとう。大好きだよチヨコ』

コタロウが私の顔に頬を何度も摺り寄せて来る。汗ばんだコタロウの頬から熱い体温が伝わつて来て心があつたまる。私もコタロウの顔の動きに合わせて顔を寄せていく。馬の時によくやつてゐるグルーミングと言うモノだ。

『うふふ……くすぐつたいよコタロウ』

『そつちこそくすぐつたいよチヨコ。…………ねえ、こうやつてふたりきりで過ごすの久しぶりだよね』

『うん……そうだね』

最後にコタロウと——、コタロウとふたりつきりで過ごしたのはいつの事だったのだろうか。御手洗廐舎に来てからはいつもボスを入れて三頭さんねんで過ごしていたし、最近は調教などはボスと一緒にすることが多くて出走レースも調教メニユーも違うコタロウとは別行動で少し距離が出来ていた気がする。その前の育成牧場時代も大勢の同期と囮まれて過ごしていたし。

となるとその前の生まれ育った牧場時代だろうか……。もうずいぶん昔に感じられる。あの頃の記憶はもうすでに霞んでぼやけかけていて、私のお母さんもコタロウのお母さんも、お世話してくれた牧場の人間達も顔が思い出せないでいる。

『このままずつとチヨコとふたりつきりで居られたらいのになあ……』

コタロウがそんな事を呟く。

『ねえ、チヨコ。俺と一緒にここから出てどこか遠くへ逃げてそこで暮らそうよ。もう無理矢理走らされたり、鞭で叩かれたりしなくて済むよ。』

仰向けに寝転がっている私を上から覗き込むコタロウ。その真剣な瞳の奥に暗い炎が灯っているように見えた。

『逃げようよチヨコ。俺とずっと一緒に居てくれ』

『……だめ。それは出来ないよコタロウ』

『なんであつ!』

『私達は競走馬、人間達と一緒に暮らし人間を乗せてレースを走り続けないといけない存在なの。人間無しでは生きていけないの』

ボスが以前言っていた。私達サラブレッドは人間の力無しでは生きてはいけない。自分たちだけで生きる野生の馬はとつくの昔に絶滅していて、私達が今生きていられるのは人間に管理飼育されているからだと。

『だから、逃げるなんて言わないで。頑張つて走ろう？頑張つて走り続けていれば、きっといつかゆつくり過ごせる日が来るから。その時一緒に暮らそう？』

『……本当？本当に頑張つて走り続けていたら、ゆつくりできる日が来るの？チヨコとふたりつきりで過ごせる日が来るの？』

『……うん。頑張つてレースいっぱい走つていっぱい賞金稼いだら”シユボバ”とか”コウロウバ”になれるの。そうしたら一日のんびり牧場で暮らせるんだって』

以前ボスがそんな事を言つていた気がする。レースや調教をすることなく一日牧場でのんびり過ごせる時期が来るそうだ。

『うななんだ……。わかつたよ、俺もう少し頑張つてみるよ』

コタロウがそう答える。彼の表情は柔らかくなり、いつの間にか暗い炎が宿る瞳はいつもの瞳に戻っていた。どうやら一安心できそうだ。

『うん、頑張ろう！……じゃあそろそろ帰ろうかコタロウ』

『うん、わかつたよ』

私は起き上がると服についた砂を払いコタロウに跨る。そしてゆつくりと調教馬場を後にしてしまった。

厩舎に戻るといつの間にかボスが自分の馬房の中に戻っていた。

『あれ? ボス起きてたの?』

寝藁の上に寝そべっているボスに近づいて声をかけてみるけど反応がない。顔を近づけるといびきが聞こえている。どうやら起きて自力で馬房に戻った後もう一度眠りについたようだ。

『ねつ! 大丈夫だつたでしょ?』

コタロウがそう言つてくる。とりあえず最悪の事態は避けられたようだ。ボスの馬房に門を掛けてコタロウを馬房に入れて馬具を取り外していく。

『ねえ、チョコ』

『なあにコタロウ?』

タオルでコタロウの身体をしつかり拭き終わつたあと、馬房から立ち去ろうとしたらコタロウが話しかけてきた。視線を向けるとコタロウが真剣な眼差しでこちらを見つめている。

『俺、チョコの事好きだから』

『??わ、私もコタロウの事好きだよ』

『ちがう』

馬房の入り口にかけた門を挟んで私を見つめて来るコタロウ。その視線に酷く濁つたように見える瞳に私は何故か少し恐怖感を感じてしまった。

『…………』

『…………』

二人でしばらく見つめ合った後、不意にコタロウが視線を逸らす。そのまま体の向きを掛けてお尻をこちらに向けてそっぽを向いてしまった。

『…………めん、何でもないよ。そもそもチヨコも自分の馬房へ戻つたら？もうそろそろ時間じやないの？』

『う、うん…………』

何だか居たまられなくなつてしまい、私も自分の馬房に戻る。門を掛けたところで身体が光の粒子を纏い始めた。

馬に戻る為の姿勢を取つて目を閉じる。夜明けが、人間達が起きる時間がやつてくれる。

(つづく)

『何でチヨコは牡馬おとこなんだ。』

……チヨコが牡馬おんななら俺のモノに、俺だけのモノにできる

のに』

# ch a p t e r . 6 「調教馬場」

—美浦トレセン 御手洗厩舎 AM 4:00

私の身体を包み込んでいた光の粒子が消える。ゆっくりと目を開けて馬体からだを確認する。黒鹿毛の前脚に蹄を確認して今日もちゃんと馬の姿に戻れたことに安堵する。

すると厩舎に明かりが灯り、二人の人間の足音が聞こえてくる。テキと国崎さんだ。

「おはよう。コタロウ、ブルドッグ、チヨコ」

テキが私達に声をかけてくれる。私はそれに「ヒイン」と鳴いて答える。

「テキ、コタロウとブルドッグの様子が——」

「ああ、ちょっと見てみる」

国崎さんに呼ばれてテキがボス達の馬房の方へ行くので気になつた私は首を伸ばして様子を伺つた。

「ブルドッグは体調を崩してるので、コタロウは脚の筋肉が妙に疲労して張つているんですね」

「確かに様子がおかしいな……国崎、今日はこの二頭の調教と運動は中止だ。俺は診療所へ連絡していくる」

そう言うとテキは走つて行つた。

「一体、どうしてこんな事に……？何が起きたんだ……？」

不安と焦りの表情を浮かべている国崎さんを見ると罪悪感が浮かんで来る。

ボスとコタロウが不調なのは昨日深夜、私がふたりを連れ出したからだ。

ボスは私が見つけてしまったビールを飲み過ぎて”フツカヨイ”と言う病気になつていて。ボスが言うには『病気じやない、すぐ治る』と言つていたけど、顔色が悪く苦しそうなボスを見てると、とてもそうには見えない……。コタロウは私が調教馬場で全力で走らせてしまい体力を使い切つてしまつたからだ。よく考えれば激しい運動の後のクールダウンと呼ばれるゆつくり目の運動と帰つてからいつも国崎さんが私達にしてくれてる脚や馬体のマッサージを私はコタロウにしてあげてなかつた。早く厩舎に戻りたい一心でコタロウの脚のケアを疎かにしてしまつたのだ。

『ごめんなさい。ボス、コタロウ…………そして国崎さん』

『チヨコは悪くないよおつ！』

『そうだ。お前が気に病むことは無いんだ。それよりも昨日は本当にすまなかつた……嬉しくてつい羽目を外してしまつた……ふたりにはみつともない姿を情けない所を見せて迷惑いっぱいかけてしまつた……本当にすまない……すまない……』

『ブ、ブルドッグ!? どうした!? どこか痛むのか!? 苦しいのか!……大丈夫だ! すぐにテ

キが獣医さん連れてきてくれるからな！」

ボスが悲しそうに咳きヒインヒインと鳴くと、心配した国崎さんがボスに寄り添つて馬体を撫でながら必死に声をかけてくれてる。重苦しい空気が厩舎を包み込み始めていた。

「おはようございます！すみません！遅れましたっ！！」

その時、大きめな声とともに頭を下げながら一人の男の人間が厩舎へやつて来る。

「浦木来たのか」

「国崎さん、おはようございます！遅れですみませんでした！…………何かあつたんですか？」

「実はブルドッグとコタロウが朝から調子を崩していてな、今テキが診療所に連絡とつているところなんだ」

「そうだつたんですか」

国崎さんと話してこの男の人は浦木巧さん。<sup>うらき こう</sup>私達のレースで背中に乗つてくれる騎手さんだ。ボスが言うには本当は私達の厩舎の人だけど訳あつて普段はよその厩舎に居てレースの時以外は時々来て調教を手伝つてくれる人だ。よくお昼過ぎに人間用に細く小さく切られたニンジンを持つてきてくれる人もある。何でも浦木さんは二

ンジンが嫌いらしい。人間用のニンジンは柔らかくて食べやすくて色んな味付けがしてあって美味しくて、せつかく人間は私達馬と違つて食べれないものが殆ど無い何でも食べれる便利な生き物なのに勿体ないなと私は思つた。

「おおつ、浦木来てくれたのか、おはようさん」

「テキ、おはようございます！遅れてすみませんでした」

テキが小走りで帰ってきた。浦木さんに気づくと声をかけている。

「ああ、それは良い。それよりも国崎、診療所と連絡が取れた。すぐ獣医が来るそうだ。その後動かせそうなら二頭を診療所に連れて行こう」

「はい」

「浦木、すまんな。トラブルが発生してな、今日はチヨコエクレール号のみの調教となる。俺と国崎はブルドッグとコタロウの面倒見ないといけないからお前一人で調教行つて来てくれ。これが今日の調教メニューだ。調教スタンドの職員にはこちらから連絡を入れてある。頼むぞ」

「はい！わかりました！」

テキからメモ用紙を受け取りそう言うと浦木さんは私の方へやつて來た。

「おはようチヨコ。なんか大変なことになつてるけど今日も頑張ろうな！」  
「<sup>はい</sup>  
「ヒイン！」

浦木さんが手早く私に馬具を装着していく。こうして見てみるとテキと国崎さんと浦木さんでは馬具の付け方や力加減が違う事に気づく。浦木さんはスピード重視で少し力が強いのかな?コタロウは嫌がつていたつけ?

「チヨコ大丈夫か?チヨコは大人しくて賢くて我慢強いから少しキツめにしてるけど……大丈夫そうだな、…………よし完成だ!」

馬具を全部付けて、浦木さんに曳かれて私は馬房から出る。

『ボス、コタロウ。行ってきます』

『ああ、いつてこい』

『いつてらっしゃい〜』

ふたりに見送られて私は厩舎を出た。

厩舎の前でグルグルと引き運動した後に、浦木さんが私に乗る為に準備を始めたので、私は首を横に向けてそれを見ることにした。これから夜に変身してボスやコタロウ達に乗る機会があるから、負担にならない様に上手な乗り降りを覚えたかった。こういうのはプロである人間の騎手さんの動きを参考にするのが確実だ。

「…………?」

浦木さんと目が合う。彼はきよどんとして私の方を見つめた後、乗る為の踏み台から

降りて私に近づき、優しく首筋を何度も撫でてくれた。

「チヨコ、大丈夫、大丈夫。ちよつと背中に乗るだけだから……なつ？」

どうやら浦木さんは私が何かをされるのではないかと警戒してると思つて いるようだつた。『違うんです。私は浦木さんの騎乗の仕方を見てボス達に乗るときの参考にしたいんです。だから気にせず乗つてください』そう言いたかつたけど今の私は競走馬だ。夜の人間体とは違つてヒトの言葉を発する事が出来ない。

このままではいつまでも経つても浦木さんが乗つてくれないので私は仕方がなく正面を向くことにした。代わりに目を瞑り神経を集中して浦木さんが私に触れる感触と手足の動作の音と気配で覚えることにした。

浦木さんが私の横に立ち踏み台に乗り鐙に足を乗せ左手を手綱と鬚を掴み鞍を持つて乗る。その一挙手一投足の音や感触や感覚とタイミングをしつかりと頭に叩き込む。「よし、行こう」

手綱から伝わる合図で私はゆっくりと厩舎の敷地から出た。

浦木さんを乗せて私は厩舎の敷地の外をぐるりと回る。2週ほどしたら再び合図、そのまま厩舎が並ぶ通りの馬道を歩いて行く。

私の蹄の音が響き、背中には浦木さんがゆらゆらと揺れている感触が鞍を通じて伝

わってくる。

夜中、変身してボス達に乗るようになり、鞍上の人間の視点が分かる様になつてから私は考えが少し変わつた。今まで背の上の人間はどちらかと言うとレース中は命令を出すけどそれ以外では背に乗る荷物・重石のイメージしかなかつたので特に気にせず適当に歩いていた。

でも今は鞍上の人間の動きが気になり少し理解できるようになつたのだ。浦木さんが私の動きに合わせてくれるよう私も浦木さんの動きに合わせて体の動きや脚使いを少し意識して動かす。ほんの少しの違いだけど、いつもより歩いて気持ち良い感じがする。

浦木さんもそれに気づいたのか、「今日のチョコは調子良さそうだ」と嬉しそうに呟いて私を撫でてくれる。とても気持ちが良い。

「あ、そう言えば調教メニュー確認しておくか。……ええつと、”角馬場で軽い運動、次にDコースを一周、単走。馬なりでチョコの様子が良ければ直線やや強めで” かあ……」

浦木さんがメモ帳を広げながらメニューを読み上げる呟きをしつかり拾いつつ調教メニューを頭に入れる。人間の文字と言葉を理解できるようになつてから嬉しい事の一つに自分が今日どんな調教を受けるのか知ることが出来る事だ。以前は今日はどこ

へ連れて行かれるのだろうか？何をされるのだろうか分からなくて不安しかなかつたけど、予め調教メニューを頭に入れておけば心の準備が出来て慌てたり不安になつたりせずに済むからだ。

厩舎が並ぶ馬道を歩いてるとあちこちの厩舎から同じようにヒトを乗せた競走馬達なまかまが出てきて、私の周りも徐々に賑やかになつて来る。鞍上の浦木さんが合流する他の厩舎の人間達に挨拶をしてる。私も鞍下の馬達に挨拶をする。

「おはようございます」

「おはよう」

「おはようござります」

「おう、浦木おはようさん」

『おはよう』

『おはよう』

『おはよう』

『おはようチヨコ。久しぶりだね』

そんな挨拶を交わしつつ私達は進んで行つた。

『うわあ……』

調教馬場前の広場に出るとそこには開門待ちの競走馬なかまとその上に乗る人間達ででごつた返していて、とても賑やかで壯觀な光景が広がっている。

レースから帰つて来てからはずっと厩舎の周りでの引き運動ばかりで調教馬場に出るようになつても軽めの調教のみで遅い時間に行つていたのもあつてこの大勢の人馬の光景に遭遇するのは本当に久しぶりだ。

あちこちにいくつも輪乗りの塊が出来ていてその間と所狭しと移動する馬達の群れを避けながら私は進んで行く。

丁度入れそうな輪乗りのグループを見つけ合流しようとした時だつた。突然周りの馬や人達がざわめき出した。

「なんだ? 何の騒ぎなんだ?」

浦木さんが騒がしい方を向くので私も向きを変えると、向こうの方から水色のメンコを付けた一頭の馬が背に乗つていた騎手を振り落としながら走つて来るのが見えた。

「放馬あ——!! 放馬ああ——!!」

誰かの大きな声が響いて周囲に馬達が半ばパニックになりながら散り散りに避けていく。

「マズイ、チヨコ! 避けるんだ!! 早くっ!! 動くんだつ!!」

浦木さんが必死に身体を揺らし手綱を引っ張つて私に合図を送るけど、私は動かず、駆け寄つて来る馬を見つめていた。何故かその馬に見覚えがある気がしたからだ。

その馬は私目掛けて駆けよつて来ると手前に減速してやがて目の前で止まつた。水色のメンコから覗く見覚えのある毛色と流星、鋭い目つきから放たれる圧の強い強者獨特のプレッシャー。もしかして――?

『オジユウチョウサンさんですか?』

『ふん、やはりお前か。あの時のブルに乗つていた人間に変身する馬は<sup>ヤツ</sup>』

『はい、そうです。おはようございます』

私がペコリと頭を下げて挨拶するとオジユウチョウサンさんはフンと鼻息を一度大きく鳴らして顔を近づける。シンシンと鼻を鳴らしながら先ずはおでこと鼻先を軽くタッチする。次にお互いに首筋に顔と鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。私達馬同士の初対面の挨拶の作法だ。

「オジユウう! オジユウウ!! ゼエツ…ゼエツ…ゼエツ…、う、浦木…すまん…怪我とかは無いか?」

「岩神さん!? 大丈夫ですか?……俺とチョコ……チョコエクレール号なら無事です」「ゼエツ…ゼエツ…、そ、そ、うか。それは良かつた。お、俺なら大丈夫だ、オジユウチョウサンがいきなり暴れて、何とか落ち着かせようとしたけど駄目だつた。でも怪我は無

いから心配するな。受け身はちゃんと取れたから」

作業着を泥だらけにして浦木さんと話してるのはオジユウチョウサンさんの騎手さんなのかな?

オジユウチョウサンさんは首筋の挨拶まで終わると今度は私の身体の横、そして後ろのお尻の方に回りながら鼻をスンスン鳴らして匂いを確認してる。

『…………』

オジユウチョウサンさんが何故か私のお尻の周りを念入りに嗅いでチエックしている。鼻息がお尻に当たつてとてもくすぐつたくてムズムズする。後ろに回られて密着されると馬の本能でつい後ろ脚で蹴りを入れてしまいそうになり体を震わせながら必死に耐える。

「チヨコ、大丈夫だ……大丈夫だ……大丈夫だから……」

そんな震えを恐怖感と緊張で震えてると思ってるといふのか浦木さんが優しく声をかけてくれながら私の鬱や首筋を撫でてくれる。違うんだけどなあと思いつつも撫でてくれる事で揺れる気持ちが落ち着くのでとてもありがたい……。オジユウチョウサンさんの斜め後ろでは石神さんが不安そうに見守ってくれている。

お尻を念入りにチエックされた後、そのまま反対側に回り最後に横側の匂いをチエツ

クし終わったのか、オジユウチョウサンさんが再び私の正面に戻ってきた。

『ファン、良い顔と馬体とケツと甘い匂いさせやがつて。それであいつを散々誘惑し誑かして骨抜きにしてきたのか、この牝馬がつ——』

——むつ

オジユウチョウサンさんが何やら盛大な誤解をしている事に気づいた。これは早く訂正せねば……。

『あの……オジユウチョウサンさん、何か勘違いしてませんか？私は牡馬です！牝馬じゃないですよ！』

遙か格上のオジユウチョウサンさん相手には言うのは少し気が引けてしまうが、この問題だけは譲れないので勇気を振り絞つてはつきりと否定する。

『あ、あん？ 牡馬だとお……？…………フフッ、フハツ、ハハツ、ハハハハハツ!! 何、

冗談言つてやがる。お前みたいにキユートでラブリーでチャーミングで牡馬を狂わせる濃厚な甘い匂いを纏う繁殖牝馬崩れみたいな奴が牡馬なわけないだろう？』

——ブチツ、カチンツ！

我慢の限界超えました。美浦トレセンに来てから何度も嫌になるくらい遭遇した光景と押し問答。あまりやりたくないし、ボスからいつも止めろと言われてるけど、こういう場合の一番簡単ですぐに片付く解決方法——、チョコエクレール、実行し

ます——。

意識を集中させて体の血流を、熱を、後ろ脚の間のある一点に集中させて、血と熱が限界まで溜まつたら、言葉と共に一気に解放させる——!!『わたしはつつ!! 牝馬おとこだつつ!! 牝馬おんなでもつつ!! 繁殖牝馬阿婆擦あばつれ崩れでもつつ!! ない!! これをよく見ろつつ!!!!』

——ボロンツ!!

ひと際盛大に嘶きながら後ろ脚から“馬つ氣”を出す。後ろ脚の間から5本目の脚が、どす赤黒く太く長く大きな“脚”が湯気を纏い姿を見せて垂れ下がる。これ、結構重い……。

『…………』

『…………』

『…………』

「…………」

辺りは不気味なくらい、シンと静まり返つていて、ドクンツドクンツと自分の身体の中と現れた”5本目の脚”が強く大きく脈打つ音だけが響いてるような錯覚に陥る。

周りを見れば人も馬も後ずさりして私達から距離を取るようにして囮んでいる。みんなの目線が低い、下を向いて一点に集中してる。私の”脚”に視線が釘付けになつている。

『デカイ……』

『デケエ……』

『負けた……』

『あんなの入らないよお……』

周囲から聞こえる困惑と恐れおののく馬達の声が聞こえてくる。牝馬と間違われあらぬ誤解を受けた時には”コレ”をするとみんな納得してくれる。ただ人間達が何かヒソヒソ呟いていて何やら失つてはいけない尊厳のような物を無くしているような気がするが気にしてる暇はない。

『……マジかよ』

オジユウチョウサンさんが私の”アレ”を見つめたまま固まつて居る。表情がどことなく引き攣つているようにも見えた。

私はオジユウチョウサンさんを鋭く見つめたまま一步前に出る。ブルンツと”5本目の脚”が揺れる。オジユウチョウサンさんが一步下がる。私が”股間のアレ”を揺らしさに一歩進む、オジユウチョウサンさんがさらに一歩後ずさりする

『オジユウチョウサンさん！これで信じて頂けましたか？』

『あ、ああ——』

オジユウチョウサンが何か言いかけた瞬間、片方から人間の腕が伸び頭絡に綱が一本繋がる。反対側にもいつの間にか引き綱が追加されていた。

「シン！今だつ！綱をひけえつ！！」

「沼永さん！？……はいっ！」

『ぐぬつ！？し、しまつたあ！クソがつ!!』

騎手の岩神さんともう一人人間——おそらくオジユウチョウサンさんの厩務員さんらしき人が綱を引っ張つてオジユウチョウサンさんが見る見る引きずられて下がつていく。

『チヨコエクレールウツ!!お前の顔と匂い!!確かに覚えたからなつ!!!』

そんなセリフを吐きながらオジユウチョウサンさんはあつとという間に向こうの方へと引っ張られて行つたのであつた。

「ふうく……危なかつたな。それにしてもお前また馬つ氣だしたのか？最近は無かつたから落ち着いたんだとおもつていたんだけどなあ！」

鞍上で浦木さんがそんな事をぼやいてる。私にも譲れない信条があるんです！大きく深呼吸を繰り返して、生えていた“5本目の脚”を引っ込めると、氣を取り直して私は

が調教馬場へと続く門に向かい歩き始める。すると進行方向に居る馬達が慌てて後ろに下がり始め、眼前には左右に分かれた馬達によつて道が作られ私達はその真ん中を堂々と歩いて行くのであつた。

門のすぐ前に来ると、まだ鍵はかかつたままだつた。

昨日、コタロウとここへ来たとき確かにこの門の鍵に触れて祈ると開いたんだよね？私は門にぶら下がつた鍵の本体部分——錠前と言うらしい——に鼻先を当てて祈る。——どうか昨晩の様に開きますように。

しかし、いくら待つても何も起きなかつた。私が真夜中に人に変身している時にしかできないんだろうか。錠前を咥えようとしたら「こらこら、咥えるんじゃない」と浦木さんに手綱を引っ張られてしまい錠前を放してしまつ。すると職員さんが走つて来て鍵を開けてくれた。

「開門——」

ゆつくりと門が開かれ、私達を先頭に競走馬の集団が調教馬場へと足を進めて行つた。

(  
つ  
づ  
く)

## chapter. 7 「コンビニ」

——美浦トレセン 御手洗厩舎 AM8:00

調教を終えてクールダウンしてから私は厩舎へと戻ってきた。調教馬場では浦木さんを乗せてとても気持ちよく走れた。人間に変身できるようになつて夜にボスやコタロウの背に乗つてみて騎手さんの動きや仕草が判る様になつて騎手さんの動きに積極的に私から合わせれるようになつたからだ。浦木さんはとても驚いていて「チヨコ、何か大きく成長したな」と言つてとても褒めてくれた。きっと明日の調教も、そして次のレースも前よりもずっと良い走りができるんだろうなと私は自信を深めていた。

「お帰り、浦木、チヨコお疲れさん」

「ただいまもどりました！」

『国崎さん、もどりました～』

厩舎では国崎さんがお出迎えしてくれて、私の背から浦木さんが降りて手綱を国崎さんに預ける。

「戻ってきたのは国崎さんだけなんですか？ブルドッグヘッドとコタロウはどうしたんですか？」

「ブルドッグヘッドとコタロウなら先程診療所へ連れて行つた。今はテキが傍について見てくれている。俺も居たが、『そろそろチヨコが戻つてくるころだからお前だけでも厩舎に居てくれ。あとは俺に任せろ』とテキに言われてな、一足先に戻つて来たんだ」「そうだったのですか」

「ああ、そうだ。ブルドッグヘッドとコタロウなら心配いらない。大事には至らないそ  
うだ」

「それは良かつた」

国崎さんからそう聞いて私は安堵する。良かつた…ボス達無事なんだ……。横では私の様に安堵の表情を浮かべていた浦木さんが「あつ！」と何か思い出したような表情を浮かべて――。

「それよりもっ!! 国崎さん!! チヨコエクレールどうしちやつたんですか?!」

「何かあつたのか?」

「何かあつたのか? って大ありますよっ! チヨコの奴、動きが驚くほど変わつてるんですよ! まるでブルドッグヘッドとコタロウの動きの良い部分だけ引き継いだみたいで! コタロウみたいなスタートダッシュからの加速の鋭い立ち上がり、コーナーへのロスの少ない進入角と安定した曲がり方はブルドッグヘッドのようで――まるでチヨコエクレールに乗つてゐるはずなのにブルドッグヘッドとコタロウにも同時に跨つてるよ

うな、それでいて二頭の悪い部分が出て無くてそこにチョコエクレールらしさが来てて——。何よりも俺の手綱や合図に瞬時に理解して反応……いやまるで俺の考えを先に読んで理解して合図の瞬間に即実行してくれて——本当に文字通り人馬一体になつた感じだつたんですよ!!」

「そ、そんなになのか?」

わたしたち  
馬みたいに鼻息荒くして興奮氣味に捲し立てるように語る浦木さんに国崎さんがやや引き気味になつてゐる。

「ええ! 次のレース、今のチョコなら1勝クラスなんて言わずにOP戦に出しても十分通用すると思いますよ! —テキやオーナーにも伝えてください!!」

「お、おおう……。わかつた……テキが帰つてきたら一応伝える」

「本当、絶対ですかね!」

「あつ! 居た! ちょっと浦木騎手!」

その時、厩舎外の馬道から一人の人間の女性が顔を覗かせる。見覚えのない顔と着てる作業服に描かれている“TORITION STABLE”的文字。浦木さんが普段いる別の厩舎の人かな?

「あれ? 仁奈じやないか! どうしたんだ?」

「どうしたんだ? ジやないでしょ! アナタ、8時からゼフィランサス号の調教なの忘れ

ていたでしよう？焰先生、カンカンに怒っていたわよ！」

怒り心頭の仁奈さんと言う厩務員さんの後では赤いラインの入った耳の部分が黄色の青色のメンコを被つた小柄な白毛の馬が顔を覗かせている。彼（彼女？）が浦木さんの次の調教馬さんなのかな？

「うわあああ…しまつたあああ！」

「お前、鳥屯先生のところでも迷惑かけているのか」

真っ青に青ざめる浦木さんとそれを呆れるように見つめる国崎さん。

「国崎さん、すみません！俺もう行きますっ！！…チヨコつ！お前と出る次のレース楽しみにしてるからなっ！」

国崎さんに頭を下げて、私の鼻筋を撫でてくれると浦木さんは大慌てで仁奈さんのところへ駆け寄り、馬に乗ると会釈して立ち去つて行つた。

「……つたく、本当に賑やかな奴だな。さあ、チヨコ洗い場へ行こう。浦木の話ならかなり走り込んだんだろう。しつかり洗つてやるからな」「ヒイン！」

国崎さんに声を掛けられて手綱を曳かれて洗い場に向かおうと私は向きをぐるりと変えると——。

——ビュユウウツ!!

突然、突風が吹きつけて来たので思わず目を瞑る。そして目を開けると、私の視界いっぱいに広がった何か白い物が私の顔に覆いかぶさるように張り付いてきた。

『きやあああああ!!!!』

「チヨ、チヨコッ!!!」

何かが顔に張り付いて前が見えない!!!息がつ、息が出来ない!!!

私は必死になつて振り払おうとするけど顔に張り付いた何かは取れないどころか益々顔に、鼻に吸い付いてくる。

『前が見えない!!息がつ息が!!助けてつ!!助けてつ!!』

『我を忘れて無我夢中で首を上下左右に振り回す。苦しいつ！苦しいつ!!助けてつ!!』

『うわあああああ!!やめろつ!!やめろつチヨコッ!!!』

引き綱伝いに首に感じる重み。国崎さんが振り回されているのを思い出して私は冷静さを取り戻す。

「チヨ、チヨコー！そうだー！そのままじつとして!!今取つてやるからな!!」

息苦しさに意識が朦朧としながらも必死に国崎さんが触りやすいように首を下げる。

「そうだー！そのままだつー！今取つてやるからな。——つ取れたつー！」

バリツと音がして一気に視界が回復して、新鮮な空気が鼻から大量に入つて来る。

「ヒインー！ヒイイイインー！ブルルツ……ブルルツ……」

沢山の空気を取り入れて徐々にぼやけていた視界が戻つて来る。目の前には作業着を泥だらけにして疲れ果てた表情を浮かべてる国崎さんが居た。私が振り回してあちらこちらにぶつけてしまつたのだろうか。

『国崎さん、 暴れてごめんなさい……』

「チヨコ、 大丈夫だ。もう大丈夫だからな……」

私が顔を寄せると国崎さんは何度も何度も顔と首筋を、私の呼吸が落ち着くまで撫でてくれていた。

「——また組合の奴らの嫌がらせか……。ゴミ何ぞ投げ込みやがつて」

そう言いながら地面に落ちている物を拾つて歩く国崎さん。洗い場の前にはさつき、私の顔に覆いかぶさつた四角くて白い紙と同じ物が何枚も散乱していた。白いビニール袋も何個か落ちてて、破れて袋からはみ出た中身にはペットボトルや何かの空容器がたくさん入つていた。

また少し風が吹いて地面に落ちていた紙が動く。一瞬ピクッと驚くものの、私はそのうちの一枚をとつさに前脚で押さえる。風に吹かれて裏返る白い紙。真っ白だと思つていた紙の反対側にはとても綺麗な印刷がしてあり何か大きな文字が書いてあつたからだ。

『あなたの街のコンビニ!! セブンマート 美浦玉屋店 本日リニューアルOPEN !!』

そう目立つような独特的印象の文字に、見た事無い平べつたい建物。カラフルな装飾が施されたその建物の周りに集う人間のイラスト。

『コンビニ……? 何だろう? もしかして食べ物がたくさん置いてるのかな?』

私がとても気になつたのは建物の絵の下に描かれた沢山の種類の食べ物だつた。知つてる食べ物、知らない——、だけど恐らく食べ物だらう思しきものがたくさん書かれていて絵の横には「20円引き」「30円引き」と書かれてた。

「コラッチヨコ。足をどけなさい!」

『あつ——!』

国崎さんに前脚を持ち上げられて見ている途中の紙を取られてしまつた。『返してつ!』と紙を取り返そうとしたけど、国崎さんの酷く歪んだ怒りと悲しみと悔しさの表情を浮かべる顔を見ると何故か出来なくて——。国崎さんはそのまま、他の拾つた紙や袋を乱暴にゴミ箱へ入れると私を曳いて洗い場へと向かつて行つた。

—PM22:00

人間に変身し終えた私は一目散にゴミ箱に駆け寄った。蓋を開けて中を漁る。

『ねえ、チヨコ。どうしたの？』

『チヨコ、一体どうしたんだ？』

私の後から、心配そうな声を上げるボスとコタロウに反応せずに私はゴミ箱を漁り続ける。少しして目的の物が見つかった。

昼間、私の顔に張り付き、国崎さんがゴミ箱へ捨てたあの綺麗な印刷された紙。ぐちやぐちやになつた塊の中から綺麗な物を見つけるとそれを持って私はボス達の元へ駆け寄つた。

『ねえ！ボス！コンビニってなあに？』

私はボスに紙を見せる。ボスは暫く眺めた後、

『コンビニとは人間の食べ物を売つてゐるお店だ。24時間お店が開いていつでも好き

な時に買う事が出来るらしい』

ボスがそう教えてくれる。うん？出来る”らしい”……？

『ボスはコンビニ行つたことないの？』

『ああ、俺も実は詳しく知らないんだ。俺の生きていた時代にはそもそもコンビニなんて無かつたしな24時間開いてていつでも買い物ができる便利な食料品店らしいのは人間達の会話で知つた。』

『24時間いつでも――？それって真夜中でも人間のエサが買えるの？それがあれば人間に変身した時のチョコのエサが手に入るんだ!!良かつたね！チョコ！人間のゴハン食べれるよ！』

『うん、そうだね』

廄舎の敷地外へ出るようになつてトレセン内を散策している時、トレセン内の人間達がゴハンが食べれる場所、”食堂”や”売店”と呼ばれる場所へ行つてみた事があるが、真っ暗で鍵も締まつてて中を覗いても食べ物らしいものは見つからなかつた。なので人間に変身してからはまだパンやお菓子のみで人間が食べるゴハン――、ボスが言うにはお米やお肉やお魚や野菜などを使つた色んな種類の豪華な食事、私達みたいにバケツ一個じやなくて何個も容器が出て来る豪勢な食事はまだ食べたことが無かつたのだつた。

『ねえ、ボス。私、このコンビニってお店行つてみたい。どうやつたら行けるの？教えて？』

私はボスにお願いしてみる。ボスですら行つたことも見た事もないお店。24時間いつでも開いていて真夜中でもニンゲンの食べ物がたくさん置いてるお店。このチラシと言う物に描かれた沢山の食べ物と楽しそうにする人間達。その風景に私はとても憧れたのであつた。

『駄目だ。コンビニへは行かない方が良い』

『ええっ！？』

ボスが反対したのは意外だつた。ボスなら賛成してくれそうな気がするのに。

『ボス、どうしてダメなの？』

『このコンビニと言う店に行くにはこのトレセン自体から出ないといけない。トレセンの敷地から出るには中央ゲートを通り抜けないといけない。だが、そこは真夜中でも人間達が何人も居て監視の目が常にある。いくら廐舎の作業着を着た人間状態のチヨコでも不審者として見つかり捕まつてしまふ。そしてもしも無事に監視の目を潜り抜けたトレセン敷地外へ出てもそこは危険が多く潜む真夜中の人間達の世界だ。何が起ころか分からない。そもそもこのコンビニは美浦トレセンから離れすぎている。中央ゲートを突破してそれからトレセンの外を大きく回つてゲートとは正反対の方角へ端

から端まで歩きさらにそこからまた長い距離を歩くことになる。とてもじゃないが人間のチョコのスピードと体力では時間内に戻つてこれないし、下手したら途中で体力が尽きて動けなくなる可能性もある。そうしたら時間切れで変身解除で一巻の終わりだ。あまりにもリスクが大きすぎる』

『ええっ!? そんなに危険なの?』

ボスの説明を聞いて絶句するコタロウと私。

『でも、ボス、この地図だとトレセンからそんなに離れてない様に見えるよ?』

私がチラシの右下に描かれた地図と呼ばれるコンビニの位置や行き方を書かれたものを見せる。地図には右上に美浦トレセンが描かれていて、そこから人間の指2本分くらい離れた位置にコンビニが描かれていたからだ。

『その地図はあくまで大まかな位置を記した簡単な物だ。実際の距離はもつと離れてるんだ。当てにしてはいけない』

『そんなあ……』

『そうだよ。チョコ。俺やつぱりチョコを行かせれない。チョコに何かあつたら嫌だ!』

『そうだ。コタロウの言う通りだ』  
ボスとコタロウが反対する。確かにそうだけど、でもどうしても私、このコンビニつ

てお店行つてみたい。

『とにかく、今日はこの話は無しだ、終わりだ』

そう言つて話を話を切り上げようとしたボスに私は話しかける。

『待つてボス！このコンビニ、ボスの大好きなビールたくさん置いてるよ？』

『なつ……！？』

私はチラシの一部を指さす。"お酒コーナーも充実!!ビール・清酒・焼酎・ウイスキー・ブランデー、その他各種日本酒・洋酒etc…酒店に負けない豊富な品揃え!!"と  
言う文字と共に数えきれないくらいのお酒の容器が並んだ小さな写真が載つていた。  
チラリとボスの顔を伺う。ボスは目を潤ませていて、『さけ……さけ……さけ……』と

言葉が漏れ震える口からは涎がポタポタと落ちていた。

『ボス……私コンビニ行きたい。ビールたくさん買つてきてあげるから。それでも……  
だめ、かな？』

上目遣いでボスを見つめると

『チヨコ。お前なら無事行けるはずだ。大丈夫だ、俺が最大限手助けしよう！』

目を輝かせてボスがそう言つてくれた。

『ちょ！ちょつとつ！ちょつと！ボスうー！何考へてるのさ？！？』

コタロウが非難の声を上げる。そんなコタロウに私はゆっくりとチラシを持って近

づく。

『コタロウ……?』

『な、何だよチヨコお!？俺は絶対に反対だからな!!ボスと違つて俺は自分の欲のために大切なチヨコを危ない目になんか絶対に遭わせな——』

『コタロウ、このコンビニ。コタロウの大好きなニンジンがあるよ?』

『なつ……!?

私が指さしたチラシの部分、野菜が沢山書かれていて正面には大きくニンジンが描かれている。『生鮮野菜コーナーも充実!!地元農家の美味しい採れたて新鮮野菜、毎日入荷中!』と文字の読めないコタロウの為に書いてある文章を読み上げる事も忘れない。『ニンジンお、ニンジン俺は……ニンジン』

ボスと違つて何とか誘惑に耐えてるコタロウ。そんなコタロウが何だか愛おしくて、私は最後の一押しに出た。

先程ゴミ箱を漁つて見つけた空容器をコタロウに見せる。それを見たコタロウがビクツと震えた。

『コタロウ……。これコタロウが大好きなニンジンジュースだよね?これ、このコンビニでしか売つてない物らしいの。このコンビニに行けばコタロウの大好きなニンジンジュース、お腹いっぱいになるまで飲めるよ……?』

以前、休憩室の冷蔵庫で見つけたニンジンジュース、それまで何本か飲んだコタロウが一番おいしいと気に入っていた商品だ。ラベルには大きく”セブンマートプレミアム”と書いてあり、裏側には”この商品は佐藤園とセブンマートが共同開発したセブンマート限定販売商品です”と書かれている。勿論その事を読み上げ伝える事も忘れな  
い。

『ねえ、コタロウ。だめ、かな……？』

上目遣いでコタロウを見つめると……。

『うん！ボスも大丈夫だつて言つてるし、チヨコならきっとコンビニへ無事行けるよ!!俺応援してるからさつ!!ニンジンニンジンニンジンニンジン』  
目を潤ませてボスに負けないくらい口から涎を垂らして答えるコタロウ。こうしてふたりの賛成を得る事が出来のであつた。

『コンビニへ行くためにトレセンの敷地内から出る方法だが、中央ゲートを通らない抜け道がある』

ボスとコタロウと並んでトレセンの敷地を歩く。今回馬具を着けることはせず私はふたりの間を歩く。乗らずに歩くのは本当に久しぶりだ。

『抜け道つて?』

『チヨコ、お前達が牧場に居た頃、放牧地を囲うに柵がしてあつただろう。実はこのトレセンも周囲をぐるりと柵で囲つてあるんだ。牧場の牧柵と違つて鋼鉄製で遙かに背が高く頑丈なんだが、実は一部壊れて穴が開いてる場所があるんだ』

『えつ! そうなの!?』

知らなかつた。トレセンの周囲に牧場と同じ柵があつて、一部壊れて抜け出せる場所があつたなんて……。そう言えば育成牧場に居た頃、壊れた柵から脱走して逃げた馬が居た気がする。コタロウも一緒に逃げ出して大騒ぎになつたのを覚えていた。

『ああ、お前たちは知らないはずだ。そこはトレセンの敷地の本当に端の部分で柵の前には木々が生い茂り見えないし。そもそもその辺りには厩舎や調教関連施設とか何もなくて俺達競走馬が近づくことはまず無いからな』

『へえー、じゃあどうしてボスはその事知つてるの?』

コタロウがボスに質問する。

『今からずつと昔、俺が今のお前たち位の歳の頃の話だ。その時、俺はオジユウ——この間会つた馬が居ただろう? アイツと同じ厩舎に居てな、ある時厩舎の馬が暴れて脱走し

たんだ。で、俺とオジユウはソイツを追いかけて——と言えば聞こえが良いが実際はどうさくさに紛れて俺達も脱走したんだ。——で、そいつが放馬して走り抜けて、最後は敷地の端つこの藪に突つ込んで動けなくなつていってな。後から追いついた俺達がソイツに話しかけたら何か喚いてるから、何が見えるんだと同じように藪に首を突つ込んだらな、見えたんだ——、大きな鋼鉄製の柵、その一部が壊れてそこから見える外の綺麗な世界がな——』

『…………』

『…………』

『ソイツは泣き喚きながらよ、”帰りたい、帰りたい、こんな地獄みたいな場所から帰りたい。ここから出てあの山の向こうにある出身生産牧場<sup>生まれ育つたお家</sup>へ帰りたい”つてな。俺とオジユウはソイツに”なら帰ろうぜ、あと少しだつ、このまま手伝つてやるぜ”と藪を一緒に引っ搔き回したんだが、そこで人間どもに追い付かれてしまつて三頭仲良く縄掛けられて終了。その後しばらくしてソイツは何処かへ運ばれて行つた。多分家には帰れななかつたようだ』

『…………』

『…………』

『あーっすまん、つい懐かしい思い出話をしたんだか重かつたな。暗い空氣にして悪

かつた』

ボスが申し訳なさそうに話す。

『ううん、気にならないで。私は大丈夫だよ。』

『ごめんボス、俺が余計な事言つたからさ、気にならないで』

私達がそう言うとお話は終わりだ頭を切り替えようと言わんばかりにボスは大きく首をブルブル震わせる。

『さて、思い出話をしていたら目的地に着いたようだ。俺の記憶が確かならこの辺りのはずだ』

ボスに言われて辺りを見渡す、トレセンの敷地の本当に端つこの部分、周りには廐舎や調教施設のような建物も無くて小さな倉庫となにやらよく分からぬ物が置いてある。馬はもちろん人間の気配すらなくてなんだか場の空気がいつものトレセンと違う不思議なちよつと居心地の悪い感じすらする場所だ。

『チヨコ、悪いが目の前の藪に入ってくれ。足元に十分気をつけてな』

『うん……』

目の前の不気味な藪の中に恐る恐る足を踏み入れて行く。まるで通さないと言わんばかりに木々や草が生い茂り、葉っぱや枝が顔や手足に当たり絡みつく。蜘蛛の巣や虫さんが顔につき時には口や鼻に入りそうになつてむせる、ペツペツペツと吐きながら私

は藪の中を突き進んでいく。

暫く進んでいると突然急に目の前が開けて、身体に絡みつく草木から解放された私は力を入れたままの勢いで飛び出し固い棒みたいなものが並んだ何かに頭を思いつきりぶつけてしまった。

「ぎゃあっ!!」

『チヨコ！？どうした！？何かがあつたのか！？』

『チヨコ！？どうした！？何かがあつたのか！？』

ボス達の心配と慌てふためく声が聞こえる。私は打ちつけたおでこを抑えて『大丈夫！大丈夫だからっ!!』と二人を安心させようと答える。やがて痛みが引き、衝撃でぼやけていた視界がクリアになると――、目の前には鋼鉄製の白い柵、そしてその間から広がる世界――。

『ボス！柵があつたよ！ボスの言つていた鋼鉄製の大きな柵、その間から外の世界が見えるの!!』

私は興奮気味に伝える。

『そうか！チヨコ、その柵壊れている部分は無いか？よく見てくれ！』

『う、うん。わかつた』

私は目の前の柵の棒を掴み揺さぶつていく。でもどれも外れてないし、外れる様子は

無い。

『ボスッ！駄目、全然びくともしないよつ！』

『チヨコ、左右に動いて場所を変えてみてくれ。もしかしたら位置がずれてるだけで少し離れたところにあるかもしてない』

『うん！』

私は目の前の柵にそつて横に歩き始める。すると目の前の柵の棒が消え外の世界がはつきり見えるようになつた。

『あつ……！』

1，2歩下がりよく見るとその部分は柵の棒が数本外れてていた。これがボスが見ていた柵が壊れて出来た穴なのかな？

『どうした、チヨコ？』

『ボス！穴、ボスが言つてた柵が壊れて出来た穴があつたよ！』

『そうか！まだ残つていたんだな！チヨコ、その穴から通り抜けれそうか？』

ボスに言われて私はその穴に身体を押し付けるが幅が足りないのか通り抜けれそうにはない。

『ボ、ボス、穴が狭くて通り抜けれないよつ！身体がつ！頭がつ！胸が引っ掛かるよお！』

『むむつ、俺達が見た穴はかなり大きかつたのだが、あれからもう7～8年は経つし直されたのか？それともそもそも場所自体が違うのか……？』

ボスの戸惑う声が聞こえる。折角ここまで来たのに無理なのかなと諦めかけた、その時だつた。

『…………？』

よく見るとその穴の左右の棒は真っ赤になつててなんだがボロボロになつてい事に気づいた。私は恐る恐るその赤茶けたボロボロの棒に触れる。ザラザラチクチクした感触に耐えながら力を籠めるとボキッと小さな音がして簡単に外れてしまった。

『これつて…もしかして……？』

同じ要領で左右の赤茶けたボロボロの棒を力を籠めて外すとやがて人間が一人横歩きで出れそうなくらいに穴が広がつた。

『ボス！穴広がつたよ！私、外に出れる!!』

『そうか！じゃあチヨコ、行つてこい！』

『チヨコ！氣を付けて！何かあつたらすぐ戻るんだよつ！』

『うん！ボス！コタロウ！私行つてくるね！』

私は柵の穴を潜り抜けた。

片足が柵の向こうへ——。

頭が——、身体が——、残りのもう片方の足が——。

柵の向こう、その先に広がる世界へ——!!!

コツンッと私の靴が、固い地面を叩く音がする。  
ゆっくりと顔を起こし正面を見据える。

目の前に広がる世界、人間の——、人間達だけの世界——。

私は後ろを振り返る——。

後ろに見える鋼鉄製の大きな柵と生い茂った真っ暗な藪、あの向こうに私の居た世界  
が——トレセンが、競走馬達の閉ざされた広くて小さな世界——。

その世界を背に私は一步ずつ歩き始める。大きく深呼吸して空気を吸う。同じ空で  
繋がっているはずなのに空氣の匂いも重さも色も違う、人間の世界——。

私はその空気を斬る様に前へと歩みを進めて行つた。

真夜中の暗い夜道を私は歩く。手にはコンビニまでの道筋が描かれた地図。バスが教えてくれた道順を書いてある正確な物だ。

”柵を越えたらまずは右を向き、トレセンの柵沿いに歩く事”

その指示に従い右手にトレセンの柵を見ながらそれに沿つて私は道を歩き続ける。

”暫く歩くとT字路に出る。『T』の形をして真っ直ぐには進めない。左に曲がる事

”しばらく歩くとバスの指示通り、大きな道に出る。真っ直ぐには進めず目の前を横切る大きな道を現れる。私はそこを左に曲がる。

”あとはその道をそのまままっすぐ歩く事。道が終わる手前の右手にコンビニがある。道中、自動車が通るので道の端に寄り気を付けて歩く事。帽子を深く被り決して人間の若い女だと悟られない事。不安なら人間や自動車の姿や気配がしたら道路わきの茂みに隠れやり過ごす事。”

ゴクリと緊張する。何故だか分からぬけど「人間の若い女だと悟られない事」と言う文言が私の心に刺さりざわめきを起こす。不安と緊張感が高まり身体が少し震える。とにかく女とバレってはいけない——。私の中で何かがそう強く訴えかけてきて私

は帽子を深く被り直すと神経を研ぎ澄ませる。帽子の中のウマ耳が鋭くとがり帽子を持ち上げようとする。その窮屈さに顔をしかめつつ私は道を歩き始めた。

「わあっ……」

暫く道を進んでいると沢山の建物が道路の左右に建つている場所に差し掛かった。これが人間達が住んでいる廐舎——、家と呼ばれる建物らしい。私達の住んでいる廐舎と違つて一軒一軒それぞれ大きさも高さも形も色も全く違う。そんな新鮮さに驚きを感じる。真つ暗な家、明かりが灯つていてる家、明かりが灯り人間達の楽しそうな会話が聞こえる家、そんな色とりどりの家々に視線と意識をもつていかれそうになり、そのたびに地図に描かれた注意事項を思い出して気を引き締めて私は歩く。

歩いてる道中に食べ物屋さんらしき建物もあつた。ステーキ屋さん、お寿司屋さん、ケーキが食べるお菓子屋さん——。だたどこも真つ暗で人の気配がしないのでトレセン内の食堂や売店と同じく夜中はやつていないようだつた。少し寂しい思いをしつつ私は歩みを進めた。

どれくらい歩いただろうか。随分長い時間歩いた気がした。後ろを振り返れば、トレセンはすっかり闇夜に溶け込んで見えなくなつていて、そんな距離と時間。歩き続けた道が突き当りで再び前に進めずさらに大きな道が横切るT字路。その手前、右側がとても眩しく光っている事に気が付いた。

私は思わず走つて駆け寄る。目の前には固い地面に覆われた広い敷地に建つ煌々と光り輝く平べつたい建物があつた。作業着のポケットからチラシを取り出し見比べる。チラシと同じ建物が目の前に確かにあつた。

「これが……コンビニ……!?」

透明なガラスで覆われた部分に近寄る。ガラス越しに覗くと建物の中は外よりもっと明るくて、たくさんの食べ物が入つて器や袋が棚いっぱいに並べてあり、さらにその状態の棚が室内に何個も並べて置いてあつた。いや、棚だけでは無くて壁も一面扉の付いた棚や光り輝く明かり付きの棚があつて隙間の無い位食べ物が敷き詰めて並べてあつた。冷蔵庫らしきものもあり、私達の廄舎の休憩所やエサ置き場の冷蔵庫よリもはるかに大きい、生まれてから一度も見た事無い大きさでもちろんこの中もジュークスが隙間なく詰め込まれていた。

「こんなに食べ物が置いてあるなんて……信じられないっ!!」

コンビニに来たら食べ物が何個置いてあるか数えてみよう——、そう呑気な事を考えていたけど、まさかこんなに食べ物が置いてあるとは想像もしなかった。これではまるで私達が走る競馬場の芝コースに芝が何本生えてるか一本ずつ数えようとすると同じだ。

あまりの食べ物と飲み物の多さに眩暈を感じつつも私は氣を奮い起こす。まだ本当の目的は済ませてない。中に入つて食べ物を手に入れなくては——。私はそう意気込むと入り口を探そうとして。

「コンビニってどこから入るんだろう?」

よく建物を見るとドアがない。建物の横にはあつたけどどうやら鍵がかかっていて開かなかつた。再びお店の正面に戻り、ガラスで覆われた部分を眺めていると——。

ピンポン♪ピンポン♪

「きやあつ!?

突然甲高い音が聞こえて目の前のガラスが勝手に動いてしまい、思わず飛びのいてしまつた。開いたガラス部分を眺める。ここから室内が良く見えててなんだか廄舎の入り口に似た感じがするけど、もしかしてここから入るのかな?

私は恐る恐ると足を踏み入れて行つた。

「いらっしゃいます」「ひや！ひやいっ！」

建物の中に入ったとたん、人間に声を掛けられて思わず変な悲鳴のような物が出てしまう。恐る恐る声の方向を向けば店にある細長い台の向こう側に人間の男の人が立つていてこちらを見つめていた。

思わず逃げようとして、ボスが「お店にはレジと言う食べ物を買うための細長い台があつてそこに立っている人間はお店の人だから安心しなさい」言つていたのを思い出す。この人は安全だ。

そう思い、軽く頭を下げて会釈をすると私はお店の中、店内を見て回ることにした。

「うわあつ……すごい…」

コンビニの店内は私にとつて未知の世界だった。見た事もない食べ物や飲み物があつて、知つてる食べ物や飲み物も見た事無い別の種類があつて、形、色、大きさ、そのすべてが新鮮で一つ手に取り眺めては棚に戻しを繰り返しながら、私は店内を堪能した。

さらにコンビニには食べ物だけでは無くて色々なもの——、ボスが言うには日用品と

呼ばれる食べ物飲み物以外で人間が必要な物が置いてあつて、さらに新聞や本までも置いてあつた。いくつかの新聞には私達競走馬の事が書かれていて、オジユウチョウサンさんが大きく写った新聞もあつた。

「すごい……コンビニ……すごい!!」

あまりにも世界が違ひ過ぎてその物量に圧倒されて私の頭はぐちゃぐちゃなり、興奮でもう「すごい」しか言葉が出てこなかつた。ありとあらゆるもののが新鮮でいつまでも此処に居たいとすら感じるようになつていた。

『～～～♪セブンマートが午前3時をお知らせします』

天井から聞こえてくる軽快な音楽と共に商品の紹介や何かの宣伝をしていた人間の声が変わり時刻を伝える音に浮かれきつていた私は目を覚ます。ふと壁の時計を見るといつの間にか午前3時を迎えていた。身体の底が一気に冷えて現実に引き戻される。

——まずい!!もうトレセンへ戻らないと!!

最近だと大体午前4時過ぎくらいに私は変身が解けてしまう。トレセンからコンビニまで結構な距離と時間があつたはず。急いで買い物をしてトレセンに戻らなければ

!!!

私は本来の目的を思い出して買い物を始める。ボスに頼まれたビール、コタロウが樂しみしてくれてるニンジンとニンジンジュース、私が飲みたかったリンゴジュース、以

前から気になり食べて見たいと思つていた馬達が食べられない種類の野菜と肉とパンで出来てゐる「ハンバーガー」、コンビニにある膨大な食べ物飲み物の中から選んだほんの少しの物だけなのに私の腕からはみ出て落ちそうになる。それだけコンビニに置いてある食べ物飲み物の数と量の凄さを感じつつそれらを取ると両腕に抱えてレジ台と呼ばれる場所に持つて行つた。

レジ台の上に持つてきた商品を置く。ボスの話ではここに置けばあとは店員さんがやつてくれるそうなのでそれを待つことにした。そつと店員さんの顔を覗く。男の店員さんは短い白髪交じりのおじさんでどことなくテキに似ている雰囲気の人だつた。テキと同じくらいの年齢の人なのかな?

テキの顔を思い浮かべるとつい顔がにやけてしまふ。そんな姿を店員のおじさんに見られそうになり、私はもう一度帽子を深く被り直して俯く。

「ハンバーガーは温めますか?」

「は、はひえ!……あ、あたためる??」

突然、店員さんに話しかけてびっくりしてしまふ。あたためる?何をするんだろうか?

「このハンバーガーを電子レンジで温めますか?それともこのまま持つて帰りますか?」

店員さんがそう尋ねて来る。ハンバーガーを温めるの? デンシレンジって何?? 見上げると店員さんは手を止めて私の反応を見てるようだ。

「……」のままでお願ひします

私はそう答えた。食べ物を温めるのには時間がかかるはずだ。以前休憩室にあつたお湯で温めるうどん。なかなかできなくてボス達とのんびり出来上がりを待つていたのを思い出す。今はそんな時間とてもじやないが無い、そもそもハンバーガーって温める食べ物かもどうかわからないし……。

「わかりました」

そう言うと店員さんは再び作業に戻った。

——ポンツ♪

『年齢確認をお願いします』

「…………」

作業していた店員さんの手が止まる。どうしたのかな?

『年齢確認をお願いします』

「…………」

レジ台横の白い機会が何か喋るのを聞きながら私は店員さんが作業を再開するのを待ちづづけていた。

「年齢確認をお願いします」

「へっ!? ねんれい……かくにん……??」

また、突然店員さんに話しかけられて私は飛び上がりそうになつた。ねんれい……かくにん……? ネンレイカクニンって何だろう?

「ええ、お嬢さんの年齢ですよ。お酒は20歳にならないと買えないのは知っていますよね」

「…………」

知らない。そんなの知らないよ……。お酒は20歳にならないと飲んでは駄目なのは私も知っている。ボスから教えてもらつたしビールの容器や箱にもそう書いてある。でも20歳にならないと買う事が出来ないなんて知らない、ボスはそんな事言つてなかつたし、どこにもそんな説明書いてない!!

私が混乱してると小さなため息が聞こえた、目の前の店員さんが吐き出したため息だつた。

「すみませんがビールはお売りできませんね」

「ダメえ……！」

そう言つて私が台に置いたビールを片付けようとする店員さん。私は思わず叫び、咄嗟にその腕をつかんでしまう。ビールをビールだけは持つて帰らないと!!!

「お願ひします。ボスが飲みたいって、ビール飲みたいって言うんです。お願ひします  
売つてください、お願ひします……」

私は店員さんの腕を強くつかんだまま震える声で懇願する。このまま帰つたらボスが、ボスが悲しんでしまう。そもそもコンビニへ行くのをボスは反対していた。それを私はビールを買って帰ると言う条件で無理やり変えさせたのだ。ボスに無理を言つて心配と迷惑かけて、それでビールは無しなんてあまりにも酷過ぎる。ボスへの裏切りだ。

「失礼ですが、年齢は？」

頭上から降つて聞こえてくる、優しい声。

「ぐすつ……ねんれい……ですか？」

溢れる涙で目の前が滲みながら私は顔を上げる。目の前には店員のおじさんの少しついた表情が見えた。その少し困った表情を浮かべる優しそうで暖かそうな顔にどこかおとうさんテキにも似た表情を感じた。

「ええ、そうです。20歳以上ならあなたはビールを買う事が出来ます。私はあなたにビールを売る事が出来ます。お嬢さん、失礼ですが年齢は……」

「3歳……です」

とつさに正直に年齢を答えてしまう。店員さんは派手にずつこけていた。気のせい

かスゴーッと凄い音がした気がする。

ああつそうじやなかつた。私が答えたのは馬の年齢だ。ボスが言うのは人間と馬は年齢の数え方も進み方も違うはず、馬の年齢を人間に当てはめると……確か……。  
「3歳!……ああ23歳の事ですよね」

ずつこけていた店員さんが起き上がりそう答えてくれる。

「…………はい！にじゅ……さんさい……23歳です！」

私は何度も頷いて答える。私の歳、人間の年齢に直すと23歳なんだ！知らなかつた何度もその数字を言葉に出し口を噛みしめ確認する。

「では年齢確認ボタン押してください」

店員さんが指をさす。レジ台横の白い機械の平べつた部分に「私は20歳以上です。【確認】と書かれており、わたしは【確認】と書かれたところを指で触る。

——ポンツ♪

『年齢確認が完了しました』

白い機械がそう告げると、止まつていた店員さんが作業を再開させる。良かつた……本当に良かつた。私は息を吐き張りつめていた気を緩めることにした。

「お会計■■■■円になります」

気が付くと作業は全部済んでいて店員さんは私が何かするのを待つてているようだつ

た。まだ何があるのだろうか？

「あのお会計を、商品の代金を頂きたいのですが…」

店員さんが何か怪しむように私に聞いてくる。一瞬何かわからなかつたけどすぐに思い出した。そうだコンビニで食べ物買つたらお金を支払わないといけない事だ。いつもは休憩室やエサ置き場から勝手に持つてきてるけど外の世界ではそれは犯罪になる、悪いことだとボスが言つていた。

もちろん私はお金を持つてきている。廐舎を出る時、事務所のテキの机から”財布”と呼ばれるお金を入れる黒い入れ物を持つてきていた。ボスがこれを持って行つてコンビニで店員に出せばよいと言つていたのを思い出し大急ぎで作業着のポケットから財布を出すと頭を下げながら両手で店員さんに差し出した。

「……………」

暫く沈黙の空気と時間が続く。いつまでも店員さんが財布を受け取らないので不思議に思い顔を上げると、店員さんは驚きと困惑と不思議な物を見たような複雑な表情を浮かべてそのまま固まつっていた。

「あの……商品のお金……財布……」

訳が分からず私も混乱氣味で尋ねる。すると固まつて居た店員さんがハツと気づい

たようで暫く何か考えるそぶりをしてそのまま私が差し出した財布を押し戻した。どうして受け取らないのだろうか?

「お金を支払う時は自分で財布からお金を出してください。財布ごと他人に渡すのはあまり感心しませんよ」

「そ、そうなのですか!」

優しい表情を浮かべてそう教えてくれる店員さん。そんな事知らなかつた……。

「す、すみません。えっと……じゃあ……お金……あれ……?」

お金を出そうとして私はそこで気づく。私、お金の種類全然分からない。財布には紙のお金と丸い金属のお金があつて数字が書いてあるけど、どうやって出せばいいんだろう。何を選んで出せばいいんだろう……。こんな事ならボスにお金の扱い方教えてもらえばよかつた……。

私が財布をもつたままオロオロしてると、店員さんの腕が伸びてきて私の持っていた財布を掴み、持っていく。

「今回だけ特別ですよ。それからお金の扱い方を知らないのですね。良ければ説明しますよ?」

優しそうに答える店員さん。その温かい優しさに私は思わずうなずいた。

「つ、はい!教えてください!お願ひします!!」

店員さんが私に丁寧に説明してくれる。お札の種類、渡し方、お釣りの受け取り方に財布の仕舞い方、私はその説明を食い入るように聞いていた。

「……これで以上です。どうですか？お金の扱い方、お店での買い物の仕方、ご理解できましたか？」

「はいっ！！本当にありがとうございました！！」

その後、私は店員さんに沢山の事を教えてもらつた。お金の扱い方だけではなくお店での買い物の仕方まで丁寧に教えて貰えた。

店員さん——このお店のオーナーさんでお店で一番偉い店長さんだと言うこの人。本当にテキに似ていてとても優しい良い人だ。

店長さんは私達の廄舎のテキみたいなポジションでコンビニも私達の廄舎に似てるところがあるんだなと私は感じていた。

「ではお疲れ様です。そしてお買い上げありがとうございました。またのお越しをお待ちしておりますね」

「はい！来ます！！このお店!!とても良いです。テンチョーさんも私大好きです!!また来ます必ず来ます！！！ありがとうございました！ありがとうございました！！」

嬉しくて、ありがたくて何度も何度もお礼の言葉と共にお辞儀をして、私はコンビニ

を後にするのであつた。

「どうしよう、時間がもうないよ……」

コンビニを出て私は酷く震えていた。お店を出る時、時計は午前3時45分を指していた。今から戻つていたらもう間に合わない。変身が解けてしまう。

このままだと私は——。最悪の予想する事態が浮かび、思わず私は頭を振る。いや、まだ、まだ諦めたらだめだ。

「一か八か全力で走つてみよう……」

そうだ、私は競走馬だ。競争馬なら全力で走るのみ。例え今は人間の姿でも、馬よりも遙かに遅い2足歩行の生き物でも——。

「やれるだけのことはしよう」

どうせだめなら最後まで足搔いてみよう。私は道路に立つと目を閉じて祈る。私は馬だ：ウマ娘だ。コンビニからトレセンまで1200m、短距離レースだ。1分20秒もあれば終わるっ！！

私はイメージする、ファンファーレが鳴りゲートに入り待機する自分の姿を——。何度も深呼吸を繰り返して——。

——ガシャンツ!!!

ゲートが開く音が聞こえて——、聞こえた気がして、私は力強く足を蹴つて前へと踏み出した。

——えつ!?

信じられなかつた。

目の前の景色が流れていく。

そのスピード、その速さ、まるでいつもの、普段の競走馬の時のことだ。

もしかして馬に戻つたの? そう思うがうつすらを光を帯び纏う身体は今の私は人間の、ウマ娘の姿のままだ。

光の粒子を纏う身体、変身解除の時は違う力が溢れて出てくる感じで私は競走馬の様に頭を低く前に伸ばす前傾姿勢を取り、競走馬そのもののスピードで道路を駆け抜けていた。

やがてあつという間にトレセンの、私が抜け出した柵の穴がある場所が見えて来たので私は減速する。中々速度が落ちなくて柵にぶつかる寸前で何とか止まる事が出来た。柵の穴を潜り藪を掻き分けてトレセン内に出ると再び私は前傾姿勢を取り駆ける。身体が光を帯び、人間離れしたスピードでトレセン内を駆け抜け行つた。

『あつ！ チヨコだつ！！ ボス！ チヨコが帰つて來たよ!!』

『ああ、 本當だ！ チヨコが無事に帰つて來たぞ！』

私が廄舎までたどり着くと、 ボスとコタロウがずっと外で待つていてくれたみたいで温かく出迎えてくれた。

『ボス！ コタロウ!! 心配かけてごめんね!! いっぱい待たせちゃつてごめんね!!』

私はふたりに抱き着くとせいいっぱい謝つた。

『気にないで!! チヨコは大冒險してきただから！ 無事帰つて来てくれただけでも嬉しいよ！』

『そうだ！ チヨコ、 お前がトレセンを出て遙か遠いコンビニまで行つて來たんだ。 何事もなく無事に帰つてきてよかつた』

ふたりにそう言われて私はとても助かる。

『ねえ！ ふたりとも約束通り、 お土産買つてきたよ！』

私はコンビニで貰つた白い袋を掲げて見せる。

『わあーいやつたあー!!』

『おおう、 ビールだつ！ 酒だつ！』

大喜びするふたりに渡そうとして、 大事なことを思い出す。

『あつ！ ボスつ！ 今何時？』

『今か……今は3時55分か。もう時間がないな。すまないチヨコ。すぐ戻る準備をしてくれ。戦利品を楽しむのはまた今度だな』

『うん、わかつたよ。ボスもコタロウもごめんね』

『うううつ：でも仕方ないよね。うん、食べるのはまだ今晚にでもするよつ！』

こうして大冒険は幕を下ろし、私達の片づけをして馬房に戻りその時を待つ。コンビニで買った食べ物は袋ごと休憩室の冷蔵庫へ。テキの財布は事務所までは持つて帰れなかつたので一緒に休憩室の机の上に置いておいた。

ボスが言うのはここなら国崎さんが見つけてテキに渡すからこの方が安全だと、言う。

テキに勝手に財布を持ち出したこと。中のお金を使つた事、財布を返さずに休憩室に置く事を詫びながら私は、光に包まれ馬へと戻るのであつた……。

(つづく)

# chapter. 8 「はじめてのおるすばん」

——美浦トレセン 御手洗厩舎 AM8:00

『嫌だつ!! 嫌だつ!! 僕は絶対行かないぞっ!!!』

コタロウが駄々をこねて馬運車に乗せようとする国崎さん達の手を焼いている。国崎さんだけでは手に負えないとテキと馬運車の運転手さんも手伝っているがコタロウは四脚を突つ張つてビクとも動こうとしない。

「くそお、コタロウの奴完全に固まつてやがるなあ」

国崎さんがコタロウを一生懸命引っ張つている。

「浦木いーすまん! チヨコを連れて来てくれ! コイツの横にチヨコを入れば多少大人しくなるんだ!」

テキが浦木さんを呼んで私を連れて来るように促してくる。ここまで意固地になつたコタロウを宥めて説得させるのが私の役目みたいだ。

「あつはいつ……ほらチヨコ行くぞ」

『はい、浦木さん』

浦木さんに曳かれてコタロウの横まで私は来る。

『コタロウ……？』

『チヨコつ!! なあ！ お前も来いよ!! 賴むよう!! お前が来ないなら俺は絶対に行かないからな!!』

コタロウがそうごねる。

今日から2週間コタロウとボスは厩舎を離れて短期放牧へ出る事になつた。最初はコタロウ一人だけだつたのだが、ひとりだけだとコタロウが寂しがると言うのことでの前の夜中にお酒の飲んで体調不良になつたボスも療養と休養を兼ねて一緒に行くことになり、私ひとり留守番になる事になつた。コタロウはそれが大変不満らしく、『なんでチヨコだけ置いて行くんだよ！ チヨコを連れて行かないんだつたら俺も行かない！』と駄々をこね始めて今日にいたつたわけである。

『私は厩舎でお留守番なの。コタロウもボスも身体調子悪いところがあるつてテキ達がいつていたけど私にはそういうところないから、だから行けないの』

『嫌だっ!! ヤダヤダヤダ嫌あだあつ!! なんでチヨコと離れ離れにならないといけないんだよ!!! 俺の横にチヨコが居ないなんて絶対やだっ!!』

私とコタロウは今まで離れ離れになつた事は殆ど無かつた。生まれてからずっと一緒だつた。最初の牧場に居た時も、次の育成牧場に居た時も、育成牧場を卒業する時も一足先に馴致を終えた私はコタロウが終わるまで待つてから一緒に卒業した。厩舎に

来てからもいつも一緒に馬房はコタロウが甘えるからとさすがに一つ離し間にボスが入つてくれたけどそれでもほぼ一緒に過ごしていた。新馬戦もその後の未勝利戦に出走するため色んな競馬場へ移動した時もコタロウといつも一緒にいた。

コタロウと離れ離れになつたのはこの間の未勝利戦が最初だつた。あの時もコタロウは凄く泣き喚いたつけ。その時は今とは逆で私が馬運車に乗りコタロウはお留守番だつたのでここまでは面倒にはならなかつた。私の名を呼び続けるコタロウを振り切つて馬運車に乗りそのまま立ち去つたのだから。今回はその逆なのでとても苦労している。なのである意味初めての一時の別れになるんだろうと感じた。

『大丈夫、もう二度と会えないわけじゃないんだから。二週間良い子にしてれば帰れるんだよ。そしたらまた私とずっと一緒になんだよ?』

『うううつ……』

三歳馬

『もうコタロウも大人なんだから。私なら大丈夫、居なくなつたりなんか絶対しないよ。二週間後コタロウ達が元気に帰つて来るのを厩舎の外でお出迎えして待つてるから。

——だから、ね?』

コタロウの頭絡を食み、頬を寄せて馬体をくつつける。そうやつてコタロウが落ち着くのをゆっくり待つ。昔、生まれ育った小さな牧場に居た頃からやつてゐる方法だ。こうして居ると昔を思い出して何だか懐かしさを感じる。最初は首を振り抵抗していた

コタロウも徐々に大人しくなつていた。

彼の馬体から伝わる熱と鼓動、それが少し落ち着いてくるのを見計らつて頭絡を咥えたままゆっくりと馬運車へと導いていく。まだ少し抵抗を見せるコタロウに「ね、行こう……？」と優しく囁きかけて歩みを促す。

馬運車のスペースにコタロウが入りきると国崎さんと運転手さんが素早く仕切りを閉め、馬運車の中に先に入つていたテキがコタロウの頭絡をロープと繋ぐ。『あつ……』とコタロウが声を上げるがもう遅い。

『静かにしろコタロウ』

暴れそうになるコタロウを一足先に馬運車に乗り込んでいたボスが睨みつける。コタロウはしょぼくれたように頃垂れてしまつた。

『ボス、コタロウをよろしくね』

『ああ、わかつた任せろ。——それよりもチョコ、お前が心配だ』  
『私？』

『そうだ。お前をひとりにして残していくからな』

ボスが心配そうに私を見つめている。

『私は大丈夫だよ。だから心配しないで。この前のレースもひとりで過ごせたし、暇になつたら人間に変身して——』

『それが駄目なんだチョコ！』

ボスが強い口調で叫ぶ、私は思わず首をすくめてしまった。

『いいかチョコ、俺達が戻るまで人間に変身するのは止める。……いや止めろとは言わないが出来るだけするな。変身しても外へは出づに廐舎内か出ても廐舎の敷地内だけにしろ。遠出、ましてやコンビニへ遊びにまた行くなんてもつてのほかだ！』

『そんな……』

ボス達が居ない間、退屈なら人間に変身してあちこちお出かけしてみようとおもつていたのだが、ボスに反対されてしまう。

『チョコ、お前のその変身能力にはまだ判らない事が多い、多すぎる。この間のコンビニ帰りで力が暴走して帰廐後に倒れるような事がまたあるかもしれない。その時俺達が傍にいないとお前を助け護ることが出来ない。だから頼む、出来るだけ変身しないでくれ』

ボスが真剣な目をして私に訴えかけてくる。あの日、初めてコンビニへ行つた日、変身解除時間までに廐舎に帰るために私は本気で競走馬の時と同じくらいのペースで走つた。その動きと力は凄まじかつたらしく廐舎に辿り着いていた時、私が身に纏つていた作業着はボロボロに破れて無くなつており、衣類の破片が普段身に纏つているドレス衣装に引っ掛かつて程度だつた。帽子もなくなり、ウマ耳が丸見えで右耳について

いる耳飾りのリボンが風に揺れていた。その後馬房に戻った私は馬の姿に戻れたものの力を使った反動で倒れてしまい高熱を出して2日ほど寝込んでしまった。さらに寝込んでいた2日間は人間に変身できなくなってしまい、変身能力を失つてしまつたのかと焦つてしまつた。

『わかつたよボス。ボス達が居ない間は人間には変身しない様にするよ』

『それで良い。寂しいかもしけんが2週間耐えてくれ』

『うん……』

「ほら、もう降りるぞチョコ」

浦木さんに促されて私は馬運車から降りる。後ろの入り口が閉まり、馬運車がゆつくりと動き出す。コタロウが私の名前を呼ぶ嘶き<sup>こえ</sup>を響かせながら厩舎が並ぶ通りを馬運車は走り去つていつた。

私は浦木さんに曳かれ厩舎に戻り馬房に入る。門を閉めて私の頭と首筋を撫でてくれる浦木さん。ボス達と別れて少ししんどくなつていた心が落ち着くようで私は頭を浦木さんに寄せて——、作業着のポケットが少し膨らんでいることに気づいた。何か固い物が入つてゐみたい、鼻でそのポケットの膨らみを軽く押してみると、

『サイバーゲームス！ウマ娘！プリティーダービー！！！』

「ブヒツイヒイン！」

突然人間の女の子の大きな声が響き渡り、レース前に聞こえるファンファーレと呼ばれる甲高い賑やかな音似た音楽が鳴り出す。突然のことに驚き軽くパニックになつた私は思わず立ち上がりつて馬房の壁に首と背中を打ちつけてしまつた。

「おいつ浦木イ!!バカ！お前何やつてんだっ!!!」

国崎さんの怒号が聞こえ、浦木さんが慌ててポケットに手を突っ込み何かを取り出した。薄い板状のものに何かカラフルな模様が動いているように見える。確かに人がここには居ない遠くにいる別の人間とお話が出来る道具、デンワ、ケータイ、スマホと言う機械だつけ。

「ううつすみません!!!!おかしいな、音量ミユートにしてアプリも切つてたはずなんだ  
けど——ああっ!!」

「ブヒイン！」

取り出した薄い板、スマホを慌てて触っていた浦木さん、すると手から滑り落ちそうになり、咄嗟に手を動かしたら、スマホが跳ねて浦木さんの手を離れ私の馬房の中へ飛んで入つてきた。びっくりした私が飛び跳ね避けるとスマホは寝藁の上を何度も跳ね

て私の前脚の横に転がってきた。

『おはよ！ほら、朝トレ行くわよ！さつさと支度しなさい！』

「ヒイン？』

薄い板から女の子の声がする。覗き込むとツルツルしたガラス板の中に女の子が居た。髪の大きい気の強そうな女の子、よく見ると人間に変身した私みたいに人間の身体にウマ耳と尻尾がある女の子だつた。もしかして私みたいに人間に変身できる競走馬さんなのかな？

『なに寝ぼけてんの？シャキつとしなさい！アタシのトレーナーなんだから！』

ウマ耳の女の子が私を見つめて話しかけてくれる。この機械は遠くいる人間とお話し出来る機械だからこの娘が私の話し相手なのかな？話しかけられているのに無視するのは駄目だから答えなきや……ええつとどうも普通の人間の声で喋っているように聞こえるけど私の言葉通じるよね？

『ここにちは。私、チヨコエクレールって言います。初めまして！』

『アタシは1番のウマ娘になる。アンタも1番のトレーナーになつてしまふついてきなさい！』

『そうなのでですか！私はあなたと同じ人間に変身できる競走馬なんですが、トレーナーつてなんですか？』

『このティアラ、似合つてるでしょ？トレセン学園に合格したお祝いでママにもらつたのよ！』

『ティアラって何ですか？ママつてお母さんの事ですか？』

『エアグルーヴ先輩つてちょっとおつかないけど……あの隙のなさは憧れるわ。』

『私にもボス、ブルドッグヘッド先輩つて馬ヒトが居るんです。とてもカッコいい憧れの先輩なんですよ』

『タキオンさんつて優しいわよね。美味しい茶葉も分けてくれるし。お役立ちグッズもくれるし。』

『…………』

話がかみ合わない。私が話しかけても、返事が来なくてどんどん別のお話をしてくれる女の子。私に気づいてないのかな？でも確かに瞳は私を見て——、やはり馬の状態だと言葉が通じないのかな？夜になつて人間に変身したら私の言葉通じるのかな？人間の機械は難しくてよくわからないよ。

「チヨコ……、頼むからじつとしててくれよ——、うわあつ！？」

馬房に入つてきた浦木さんがスマホを取ろうとする。私この娘と会話中なんですけど……、近づいて来た浦木さんを頭で押し返すと浦木さんが後ろに仰け反つてたらを踏む。スマホの位置を変えようと前脚でスマホを軽く蹴つて馬房の奥へ持つていこう

としたら画面が変わった。

『あれ?』

流れる音楽が変わり私に話しかけてくれた女の子が居なくなり、今度は別の女の子が現れる。次に現れた女の子は喋らない代わりに小さな画面の中いつぱいに動き回つている。大きなウマ耳と長い黒髪で顔が半分隠れた女の子、小さめのウマ耳と赤みががつた髪色の身体に包帯を巻きつけた女の子が居て”ピックアップ プリティーダービーチャ”と書かれていた。どうやら画面に触ると変わるみたい、さつきの娘はどこに居るんだろうか?

私が鼻先でガラス板に触ると”ピチョン”と音がして画面の中に四角い表示物が現れる。

『ガチャ確認 ジュエルを1500個使用してピックアップ プリティーダービーチャを10回行います』

画面に現れた四角い表示物にはそう書いてあり、その下に小さな文字で何かがいっぽい描いてあつた。よく見ると表示物の下に大きなボタンが二つあり、うち一つは緑色で塗られていて協調されていた。確かにコンビニでビールを買つた時にテンチョーさんに押しなさいと言われたモノによく似ていた。

私は人間だと23歳でビール買える年齢らしいので緑で塗られたボタンを押してみ

る。もう一度”ピチヨン”と音がして画面が変わり音楽が止まり静かになる。

『……？』

暫く無音状態が続いた後、突然盛大な音楽が鳴り響き出しひっくりして飛び跳ねそうになる。小さな画面の中では猫を乗せた帽子を被つた小柄の少女が「激熱ッ！」と書かれたモノを持ち、走りながらドアを開ける。すると見慣れた競馬場とその競馬場にある芝のコースの風景が広がりその先には私達がレースで入るゲートによく似たものが映っていた。

『ポピイン！ポピイン！カンツ！カンツ！ポピイン！ポピイン！ポピイン！

カンツ！カンツ！』

並んだゲートのドアが一つずつ順番に色が変わつて行く。虹色 虹色 金色 金色  
虹色 虹色 虹色 金色 金色、とてもカラフルで綺麗だなと私は感じた。  
ゲートの上の赤いランプが灯ると虹色に輝くゲートが開き人影が飛び足してきた。  
『噛んだら痛いから…噛みつくのは、勝利にだけ！』

少し気の弱そうな声がして先程の画面に居た黒髪の女の子が出て来る。名前は「Ma  
ke up Vampi re！」ライスシャワーさんと言うらしい。

『怖がらなくとも大丈夫ですよ。あなたのマミーですから♪』

次の虹色のゲートから飛び出したのは優しそうな声をしたウマ耳の女の子は身体を

白い包帯で覆われている。この子もさつきの画面に居た娘さんで、名前は「シフォンリボンマミー」スープ・パークリークさんと言うそうだ。どうやら緑のボタンを押すと女の子が出てくる仕組みになつてているようだ。

「嘘だろ……」

いつの間にか横に来ていた浦木さんが驚いた表情を浮かべていた。私、もしかして何かしてしまつたのだろうか？

震えながらスマホを拾い上げ、画面を触つていく浦木さん、虹色のゲートが開くたびに人の声がして色んな形や色をした衣装を身に纏つた女の子たちが出てくる。

「は、はははは……、一発でピックアップ全抜きに未所持☆3カード4枚……。そもそも虹ゲートつて6つも出て来るのか……、こんな事つてあるのかよ……。ありがとうございます!! チョコエクレール、いやチョコエクレール大明神様っ!!」

乾いた笑いを浮かべていたと思つたら、突然目の前で土下座をする浦木さん。

「浦木……お前何やつてるんだ」

顔を上げれば呆れた表情を浮かべた国崎さんと事態が呑み込めず困惑してゐテキの姿があつた。

「く、国崎さん!! チョコが！俺のスマホを触つて！ガチャを回したら虹がいっぱい出て！！」

「何訳の分からぬこと言つてゐるんだ。いい年して、ゲームなんぞに現を抜かして、そんなのだから何時までもヒヨツコ騎手呼ばわりされるんだろうが」

「浦木、お前、それがウマ娘とか言うゲームなのか？そのゲームに詳しいのか？」

国崎さんが浦木さんを叱りつけていると後ろからテキが覗き込んで尋ねている。

「テキ！テキもウマ娘に興味あるのですか！？良いですよ！ウマ娘のアプリの入れ方とか攻略方法など何でも聞いてください！」

「あー、悪いがゲームには興味無くてな。それよりも浦木、そのウマ娘と言うゲームにうちのチヨコが出てるのか？」

子供の様に目を輝かせてテキに迫る浦木さん。その勢いに押されつつテキが質問をする。

「えつ！？」

『ええつ！？』

思わず、浦木さんと声がダブってしまう。私は人の言葉ではなくて鳴き声だけだ。

私？私がこのゲームの中に居るの？？後ろから浦木さんの手にあるスマホを覗いてみる、画面には10人のウマ娘さんの顔が映つていたけど、私はその中には居なかつた。「いやいや、さすがにチヨコエクレールのウマ娘化は無いですよ。まだデビューして2年目の現役ですし、成績も未勝利戦1勝のみですから」

「おい！うちのチヨコをバカにしてるのか!?」

「痛ついててててつ!!違います！誤解ですよ国崎さんっ!!」

国崎さんに耳を抓られて痛がる浦木さんをよそに私は考え込む。もしかしてこのスマホのゲーム？と言うのが私が人間——ウマ娘に変身できることに何か関係あるのだろうか？

「そうか、チヨコはこのゲームに出てないのか……」

テキが少し寂しそうにそうつぶやく。テキ、私が出てたらこのゲームをしていたのかな？

「でもいきなりどうしたんです？チヨコとウマ娘に何か関係があるんですか？」

「いや、実はな、この間の未勝利戦後にチヨコ宛にファンレターが来てな。その中にチヨコをウマ娘にした絵があつたんだ。だからうちのチヨコがそのゲームに出てるのか気になつてたんだ」

そう言つてテキが馬房に飾られた私の絵を指さす。浦木さんが私の馬房に入り、その絵をまじまじと見つめてる。何かわかるのかな？

「……これは”オリジナルウマ娘”ですね」

「お、オリジナルウマ娘え？」

「何だそれは……」

絵を見て浦木さんがそう呟くとテキと国崎さんが不思議そうに尋ねる。

「ウマ娘のファンがゲームに実装されてない競走馬を自分でウマ娘にして描いてるイラストなんです。キャラの顔や身体や勝負服のデザインを元の競走馬を参考に独自に考案して書いてるんですよ」

「これがそうなのか……？」

「素人のオタクが描いてるとは信じられないな。どう見てもプロの漫画家が描いてるみたいじゃないか」

飾られた私の絵を見て感嘆を漏らすテキと国崎さん。私も思わず見つめる。確かにこの私の絵はとても丁寧に書かれている。コンビニで置いてあつた本に書かれた人間の女の子の絵よりも線がいっぱい描かれてて綺麗だなと思った。

「オタクにはプロ顔負けの腕を持つたアマチュアの絵描きさんが大勢いるんです。中には本当にプロになる人も居て。——ああ、この絵師さん知っていますよ。この人、ウマ娘の絵を描くファンの中でもトップクラスの人ですよ。一部ではウマ娘のゲームのメーカーの人よりも上手いと言われてる超有名な人なんです」

浦木さんが絵の隅を指さしてそう語る。よく見れば何か人の名前のような物が小さく書き込まれている。よく見えないがこの人が私のファンでお手紙とイラストをくれた人なんだ。

「良かつたなチョコ。お前すごい人にファンになつて貰つて応援して貰えてるんだそ」

そう言いながら浦木さんが私を撫でてくれる。

浦木さんに撫でて貰いながら目を瞑り思い出せば頭の中での日、私に贈られた温かい言葉、励ましの言葉が蘇つて来る——。私、そんなすごい人にファンになつて貰い応援していただけてるんだ。そう思うととても元気が湧いてくるような気がしてきた。

(つづく)